

である。であるから、何時と問うて其答に年を記せず、日を記せずと云つても、なほ忘れたもの、即ち解すべからずと解することを得るのである。斯くて疑問者は其疑を不満足に満足さす事が出来る、そうしてそれがまた人情の自然である。

即ち叙事文の年月を必要とするのは尙ほかの地理書の経緯度の如く、これがなければ事實の精確明瞭を缺いて、人の知りたいたいお飽くまでの自然の情に戻るものである。けれども時としては随分この年月を缺く事がある、若かも年月を缺いたものはこの年月に代るやうな例へば、平安朝時代は藤原氏の全盛時代なりき、而して其權勢を抑へ給ひしは獨り後三條天皇あらしのみといふ如く、時代、執權者、天皇、有力なる代表物等を以てすることがある。

第二十日 叙事文 (四)

こゝでは自然の變化を寫した例を擧げやう。記事文に例したのは變化行動のない、動かない景色であつた、こゝに叙事文例として擧げるのは、動く景色である、眞鶴岬の空あたり、一握の黒雲浮べると見る間に海には白波の鱗を刻んで長

者が岬や葉山の景色が手に取るやうに見えて来た、瞬く暇に擧覆す尋常ならぬ空模様、驚破とばかり、櫓柄を直す間もあらず、雲は簇々と膨れ立ち、址れ、亂れ、狂ひ、纏れて東の空へ垂れかゝれば、どつと、轟しく、暴風の煽り、水は奔馬と逆捲き立つて、沖は雷霆の轟くやう、崩れ落る數十尺の大濤は、鶴島の岩を一揉みに揉んで、根こぎに抜いて引浚ふやうな物凄しい暴風になつたので。

諸肌脱いで、緊と櫓柄を執つた、揺り上げ振り落す大波に逆らつて必死になつて、舳を回したが、流石手練の漁師であるが、哮りに猛る海魔の荒びには勝ち得べきやうもない、藍碧の小山を打附るやうに、喧と寄せ来る一波に押されて、微かに鶴島の岩鼻に觸れたと思ふと、唯一つの頼りにする櫓の先が、脆くもポツキと折れて仕舞つた、船は機轉を食つて四五段ばかり矢を射るやうに流される。(幻影、掬汀作)

これは『幻影』中の片瀬川といふ一節を抜載したのである、文の要に曰く、今年三月下旬のある日の事、三十六里の灘に、東浦五百人の漁師仲間、黒鯛釣の名代の上、手といはれた男が、いつもの鯛つりに出てからの午下、今一働きと立ち直つた時、抜載

の如き光景を描き出したと。

自然と人との奮闘格闘する光景目に見るやうである。記事文は寫真器の「シャッター」で寫し出した瞬時の光景である、叙事文は其瞬時を連続して寫すのである。

應さに出づべくして出でざる日は、東の方いかなる雲圍の弱點を突破せむかと、視ふものゝ如し、偶々東南の方に向ひて、兩脚の如き光あり、樺色の雲を貫きて、水の色むしろ無色の空を、桃紅に染むるや、水色なせる領分は、次第に畏縮して、敢へて争はず、雪浪、氷浪、線浪の遙かに盡くるところ地球の中心より火の海を涌かし來る如く、陶壺中に灼熱せられたる陶土の如き雲は離々として、朱樺の林を簇生したる島嶼を成す、初めは伊豆七島の一にならむかと疑ひ後に方角違ひに一笑す。されど日未だ出でざるなり。

北を回顧すれば、甲斐の高丘は金峰山の一例を先手とし、白玻璃函を半ば啓いて、泛び出でたる紫玻璃の如く、銳角を一天に突破す、雪浪、氷山、奔騰之と高さを競ひて落ちず、かゝるとき兩脚の如くなる光は、佛手柑狀を成して、交る／＼天に向ひて、彈き初めたりしが、やがてすつくと萬丈の空氣柱を立て、樺の大雲に

喰ひ入るや、雲は俄に變色して、何とも名狀すべからざる茶褐色を作り、綿々として幅ひろがりぬ、我が立てる四周も、遽々然として惡夢より醒めたる如く、室の前なる白木の華表、先づ鮮やかに額白くなりぬ、(不二山、鳥水作)

これは須走り口で觀察した、日の出の不二を寫した一節を摘録したのである。その色彩の美、變色の光景、雲の形狀の變化等、自然の活動を仔細に描き出して、餘す處なく、殊に光線の運動を描寫した處最も妙である。これは雲の上に立つて雲の變化、色彩、光線の移り行く狀を寫したのであるが、今海に向つて水蒸氣を觀察した水蒸氣の運動を示さう。

霜の極めて劇しき朝は、相模灘の水蒸氣霧の如く立のぼる。

今日、午前七時半高きに上つて望むに、田越川より相洋にかけて、唯一面蒼白き水蒸氣、濛々として煙の如く、遠くして富士、近くして小坪の岬、僅かに半身を露はすのみ、江の島も初めは隠見したりしも、終にかき消されぬ、足柄、箱根は襲ひ上る水氣を防ぎ兼ねて、屢々姿を隠す。

七時四十分、日や、高く上りて、満月の水蒸氣忽ち透明なる薄紫の色になりぬ、

日の蒸すに従ひて、相模灘上の紫氣いよ／＼勢猛く騰上して、江の島は全く影を没し、足柄箱根も辛ふじてすばかり頭を露はすのみ、一秒又一秒、水蒸氣の勢宛ながら猛火の煙の如くますます／＼渦まき上りて、富士の半峰と、小坪の岬の巔を除くの外、盡く群山を隠蔽し、侵蝕し、沸々として底止する所を知らず、日は之を煽ぎて、満月の紫、燦々としてまさに天心を衝かむとす。

七時五十分、日は遍ねく水蒸氣の中に満ち渡りぬ、洋上に瀾漫したる紫の水氣は流石に日の力を感じて處々に割け目を生じ、思はぬ方に海の一線を見せ、思はぬ空に山の一角を露はし、富士先づ脚を抽きて、足柄箱根の顔を見、江の島紫煙の絶え間より笑み、海と山も漸く界を劃して、小坪の岬、赫奕として日麓に及ぶ。  
(自然と人生  
 總富蘆花作)

第二十一日 叙事文 (五)

以上は自然に於ける變化の行動を描いたのであつた、處が時として人間も之れを他から見て自然の景物中に入ることがある。

對岸はまだ眠つて居るが、此方の村は最早さめた、背後の茅舎から煙が立上る、今柵を出た家鴨は足跡を霜に印けて、刮々呼びながら、朝日を碎いて水に飛び込む、川楊の枝に小鳥が囀へづる、今起きて來た村人が白い息を吹き／＼川に下りて、河水を掬んで嗽き、顔を洗ひ、それから遙かに筑波の方へ向いて、掌を合して拜むで居る、(利根の秋曉、蘆花作)

これらの景物中に入つて居る人間はまた甚だ自然と同化されて居る。

田植悉に行かむとてにやあらむ、苗を滿載せる篤舟のへさきには五十歳ばかりの老夫、煙草をかかし、ともに菅笠着たるもの、船をあやつる、赤き細帶しめたる姿の女とは見えけるが、近く我が舟のほとりを過ぎ行く時始めて菅笠の下、顔を見たるに、農夫にもかゝる人がと思はるゝばかり、美しき少女也、清き目、白き頬、江山も俄かに光彩を添へたる心地す、(鹿島詣、桂月)

斯様な人物の描寫もまた畫中のものであらう、唯この人物に一片の情を吹き込む、ひともう自然と一緒には取り扱はれない。

以上に依つて諸子は、動く景色を如何に描くかといふ事を知つた、即ち叙景の法

を得たのである、すればこれに對する智識と、既に得た記事文の智識とをそうして昔の物語りに耳を馴らして居る叙事の順序とこれ程の智識を綜合して今日課する宿題を作らねばならぬ。

題は 日出日没の近郊

必ずしも日出に限るでもなく、又日没に限るでもない、日出日没の何れかに於て、約一時間以内の寫生がしてほしい。五分間でもよい、十分間でもよい、若し市街に住んで居る人があるなら、橋の上に立つて十分ばかり、朝露に包まれ、日が顔を出す時位までを寫生するのもよい。海に近い人は、海の日、日の出、日の入、山に近い人は、山の日出、没、それは諸子の隨意に任かせる。唯必要なのは色彩の變化、雲の變態、四圍の變遷、これ等を逃してはならぬ、そうして其參考には記事文中のもの、紀行文中のもの、一々に注意して精讀すると手軽く出来る。

第二十二日 叙事文 (六)

こゝでは人の動作を寫した例を挙げやう。記事文には繪に描かれた人のやう

に動かない人を示したが、こゝでは動く人を示さう。

坊やは綺麗になりました、母も後毛を搔き上げて、而して手水を使つて、乳母が脊後から羽織らせた紋付に手を通して胸へ水色の下締を卷いたんだが、自分で帯を取つて締めやうとすると、それなり力が抜けて、膝を支いたので、乳母が慌て、確乎抱くと、直ぐに天鷲絨の括枕に鳩尾を壓へて、其上へ胸を伏せたですよ。

産んで下すつた禮を言ふのに、唯御機嫌好うとさへ言へば可いと、父から言いつかつて、枕元に手を支いて、其處へ顔を上げた私と、枕に凭れながら、熟と眺めた母と顔が合ふと、坊や最う復るよと言つて、涙をはらく、差内向いて弱々と成つたでせう。

父が肩を抱いて徐と横に寝かした、乳母が搔卷を被せ懸けると、襟に手をかけて、向ふを向いて了ひました。(藥草取鏡花作)

諸子は屢々斯様な状態を見るであらう、けれども如何なる詞を以てこれを言ひ表はせばよいか、これに當惑するのである。しかもそれは正直にありのままを寫

生すればよいのであるが、其ありのまゝの寫生といふ事がむづかしい、唯油斷しないやうに何事にも常に氣を着けて其動作の順序を見て置くといふより外に道はない。

この文で母の動作中第一番にやつたのが、後れ毛を掻き上げる事で、それから第二に手水を使ふ、それが濟んで第三に乳母が脊後から羽織らせた紋付に手を通すことに注意すべきは母のする動作が主になつて居るので、乳母のする動作はこれに伴ふのであるから、乳母が母の脊後から紋付を羽織らせた時は、母が後れ毛を掻き上げた時か、手水を使つた時か、それともそれが濟むでからか、そんな事は問ふ要がない、母の手を通した順序は第三番目に相當するのである、第四が胸へ下締を巻く、第五が帯をとつて締めやうとする、第六が力抜けて膝を支く、そこで乳母が抱きとめる、第七である、第八は天鷲絨の括枕に鳩尾を壓へる、こゝにまた注意すべきは前述の如く主なるものが母である、故に文章も、乳母が慌て、確乎抱くと、母は直ぐに天鷲絨の括枕に云々と自ら括弧内の母はといふ二字の必要なるべきを略して意を貫通せしめて居る、第九其上へ胸を併せた。

斯様に自然の順序を追うて筆を下せば動作の變化は自らに筆に上るのである。

酒又十數行、主人更に銀屏風を持ち來りて、畫を請ふ、此時には、廣業既に醉へり、わたしやお前にもりつふされてなど、假聲つかひつゝ竹を畫く、一線ひき終れば、ひとつ歌うたひ、うたひ止んで又筆を走らす、醉愈加はりて、畫いよく奇なり、(利根川の一日、桂月作)

畫伯の謠ひつゝ筆を行るさま、見るやうである、

一尾の大鯉を網し得たり、長さ二尺許、料理人の翁、頭白くして雪の如し、左手に濺刺たる鯉を握り、右手に快刀をとりて、一たび揮へば、忽ち頭尾處を異にす、鮮血流るゝこと泉の如く、頭上の白髪と相映じて、觀殊に奇なり、切りはなせる鯉の頭を俎上に立つれば、なほ口を動かす、身を切りて、あらひとなせば、肉なほ躍る、(以上)

翁と鯉とが相對映する動作誠に目の前に髣髴たるものがある、この文では鯉と翁とが交互で、第一に鯉を握り、第二に刀を執り、第三に之れを揮ふ、第四鯉頭尾を異にし、第五鮮血流る、第六之れに白頭映す、第七頭を俎上に立つ、第八口動き、第九身を

切る、第十肉躍る。順序は自然である。

第二十三日

敘事文 (七)

自然の變化、人の行動、それ等は前回を以て大體を説明した、こんどは自分のおもむき、想像若くは考へといふやうな形に見えないものを寫さうと思ふ。

誠や小督は嵯峨の邊片折戸とかやしたる内にありと申す者のあるぞとよ、あるじが名をば知らずとも尋ねて参らせてんやと仰せければ、仲國あるじが名を知り候はではいかでか尋ね逢ひ参らせ候ふべきと申しければ、主上實にもとて、御涙せきあへさせまします、仲國つくづく物を案ずるに、まことや小督の殿は琴彈き給ひしぞかし、是月のあかきに君の事思ひ出で参らせて琴彈き給はぬことはよもあらじ、内裏にて琴彈き給ひし時、仲國笛の役に召され参らせしかば、其琴の音は何處にても聞き知らんずるものを嵯峨の在家幾程かあらむ、打廻りて尋ねんに、なか聞き出さるべきと思ひ、さ候はよ、あるじが名は知らずとも尋ね参らせ候ふべき(平家物語)

想像は事實らしく書かねばならぬ。又想像の記事によつて直ちに其現状を髣髴たらしむるやう書かねばならぬ、さればとて是れを源平盛衰記のやう、

今宵は名にし負ふ八月十五の月の夜なり、折節空も陰なし、君の御事思召出で、など飾れよといふのではない、平家物語の如く、

是月のあかきに君の事思ひ出で、と質直に書き放した方が情趣一段である、又この文の

嵯峨の在家幾程かあらむ、打廻りて尋ねんに、なか聞き出さるべきと思ひ、云々。

といふ詞のうちには源平盛衰記が

嵯峨の在家廣しといへ共思ふに幾程かあべるき、王事もろき事なし、打過て琴の爪音を案内として、なか尋逢ひ進せざるべき、假令今夜叶すば、五日も十日も伺ひ聞きな、博雅の三位は三年まで會坂の藁屋の軒に通ひつゝ、流泉啄木の二曲を聞きてもこそ有けれと思ひければ、云々。

といふ意は盡く含むで居る。否それ以上にも仲國の決心が見える、現状を髣髴せ

しむる必ずしも多くの詞を要せない。必ずしも源平盛衰記の如く古事を引き文を花やかにして管々しく書くには及ばない。想像は飽くまで正直に考へは飽くまで眞卒でなければならぬ。

八六

静に玄關口に立向つたが、心怯れがするのであらう、暫く逡巡いて考へ込む。突然恚うして押掛けたならば、定めし厚面皮いと思ふであらう、否、彼女は暫く別にして、曹長殿が不快い顔をしないだらうか、いや、那樣事のあらう筈はない、曹長は漸く屯田聯隊に入つた當時、父に勸めて此地に移住させた程の人である、自分も幼い時から出入して一方ならず鍾愛された間柄である、それが今、私立大學を卒業して、目出度歸省したといふに、厭惡な感を有つて居る筈はない、然うだ、必ず悦んで迎へて呉れるに相違ないのだ。(極樂村一節、掬江)

この文の如きは玄關口に立つて案内を乞はふといふ其間の想像である。實際考へる時間は何分といふ僅の間であるが、文字に表はすと餘程長いものになる。そこで注意すべきは文章と實際と全く寫生に出でなければならぬが、斯様な時の考へを表はすには、成る可く端折つて主要な想像丈けを連結さすやうにして、管々しく書かぬがよい。然うでないとその記事が事實であつても、想像時間が長過ぎる感があつて事實と受け取れぬ恐れがある。故に話説の進行には必ず緩急を必要とするが、一に凝滞しないやう留意せなければならぬ。

第二十四日 叙事文 (八)

叙事文は單に人の形狀と動作とを現はすに止らないで更に其性情を描かねばならぬ。人の性情を描寫するには或は動作を以てし、或は談話其他言語を以てする場合もある、また自己のおもむくによつて推斷することもある。まかしそれは自然に寫生したる事が直に其性情を作るのであるから事實に於て別段の工夫を要するのではない。殊に小説戯曲の如きは人物の性格を描寫するといふ事が其主なるものに成つて居るが、而もフランスの大家フローベルが其門人モウパッサンに教へて爾ち先づ巴里の市街を見て以て描かんと欲するものを取りこれを事實のまま他人の到底描く能はざる特色を以て描き來れといつたのによつて見ても、寫生以外に人間性情の描寫はない事が解るであらう。例へば率直な古武士の典

八七

型だといはれた淺野長政の性格を知らうと思へば、其一班は文祿二年太閤朝鮮征伐評議の時に見る事が出来るのである。當時徳川以下諸大名は名護屋の陣に集つて朝鮮征伐の未だ果敢くしく行かない處から秀吉自ら三軍を統べて利家氏郷に大將させ日本の後事を家康に托して出かけやうといふ、家康は自分も弓馬の家を生れたのだから先鋒がさせてほしいといふ、すると例の彈正少弼長政が進み出ていふには

あらばく候徳川殿、殿下此年月の御振舞ひかしの御心とや思召すとしふる狐の入りかはつて候を、何事をかの給ふべきと申しも果てぬに、太閤御はかせに手をかけられ、やあ秀吉が心に狐の入りかはつたるいはんきつと申せ、申し損じなばしやくび打ち落してくれんすとせめかけく、仰けるに彈正少弼ちつともさばがず、長政等如きは何百人か首はねられんとも、なん條ことの候べき、抑も此年頃よしなき軍起し、異國のみにあらず、本朝にも父をうたせ子をうたせ、兄弟をうしなひ、夫にはなれ、妻にはなれ、嘆き苦しむもの天下に満つ、又それに兵糧の轉漕軍勢の賦役、六十餘州が内悉くあれ野となる、けふ御發向あらん

には、五畿七道の間、竊盜強盜蜂の如くに起て、やすい所も候まじ、徳川殿如何に思ひ給ふとも、いかでか之を防ぎて、うできなく御あと守り給ふこと叶ふべき、此等の事を思ひてこそ、先陣とはの給ふらめされば、其の御心ならむには、かほどのことなど、御心付なかるべき、かゝる御心のつき給ふこと、これたゞ事に非ず、一定ふる狐の入りかはつたるにて候はずや、いかにいやしきもの、諺に人取らんとする、鼯は人にとらるゝとは、此御事にて候ぞと、憚る處なく申ければ、太閤鼯にもせよ、狐にもせよ、おのが主と頼みたらん者に、雑言を吐く條、奇怪なりと、飛びかゝらむとし給ふを、利家氏郷おしへだて、人々御前に伺候せり、長政が首をはねんに御手をふるさるゝ迄も、候はじ、そこのき候へ、彈正といはれて、長政はさらぬ體にもてなし、人々に色代して、おのが陣に歸り御使を待つて、腹切らんとす、かさねて仰出さる旨もなし、かゝる所に肥後國に逆徒起りぬと、早馬を參らす、太閤大きに驚き給ひ、徳川殿に御使あつて、長政具して御參おれと仰らる、やがて長政めしやせらる、太閤肥後國に逆徒起りぬ、汝が嫡子左京大夫、幸長追討の使たるべしと仰下さる、長政大に悦びぬ、又徳川殿にむかひ給ひ



幸長いまだ年わかし本多を副へて給ふべしと仰らる、やがて彼逆徒國人等うちてまゐらせければ軍をば出さず(藩翰譜)  
これは新井白石の文であるが獨り長政の直諫して憚らず質實古武士の風ある性情が流露して居るのみならず、太閤の短氣にして而かも人を見るの明あり、非を悟るの吝ならぬ點がありくと見える。

第二十五日

叙事文 (九)

弔祭の文は叙事文例として解剖するに餘程都合がよい。即ち一つは、ある一人の傳記となり、一つは自己の情を叙ふる文として見る事が出来る、今桂月が大橋乙羽を弔ふた一文を擧げて其概要を解剖説明しやう。

明日知らぬ身と思へども暮れぬ間の今日は人こそ悲しかりけれ、累年の持病に弱りゆく我身なほ生きながらへて、平生壯健なりし君まづ逝かむとは思ひがけきや。明治三十四年六月三日、都のかたほとりなる、日暮里村、馬琴の筆塚の立てるあたり、冷かやなる黄土、君が未死の魂を埋めつくしぬ、濛々たる満天

の雨、空もために悲しみ、血を吐く杜鵑いと恨を添へぬ、悲しい哉。

冒頭先づ一首の和歌を引き來つて、自分の情を叙べた、自分の明日の命があるてにならぬ、けれども命のある間は人に悲まるべき運命を有つ自分にしてなほ人の今日死んで行くのが悲しいといふ、以て全文の脊梁骨を作つた、この冒頭によつて、次に累年云々の感が起る、即ち自分と乙羽とを引きくらべた、これは事實の感である。和歌を以て抽象的に人生を觀じ、事實を以て是れを實際に引きくらべる時、之れを讀むもの、情は愈切になるのである、こゝに文は一段落して、次に其埋葬に及んだ、馬琴の筆塚の立てるあたり、これを谷中あたりにして、高橋お傳の碑の傍ら、若くは相馬大作の碑のたてるあたり、なぞしたのでは何の妙もないのみならず、全文はこれが爲めに破られないのに迷ふだらう、これが徳川文學の一方の旗頭であつた、馬琴なるが故に當代知名の文士乙羽と相並んで、いふにはれぬ妙趣がある、次に、空もために悲しみ、雨がふる、すると自分の悲しい思から無情の天地までも自分と

同じく情あるものと心得て、空も悲しむかと思ふのである。血を吐く、杜鵑、これ亦同様の感である。處が、こゝは、日暮里、折よく、雨が降つたから、この文は事實の感懐であるが、これが東京の真、中時鳥などの聞えぬところ、晴天の下で埋葬する時の弔文にまで屢々用ひられる、即ち空が悲むとか、血を吐く、時鳥とか、いふものは葬式の附屬物のやうに心得て居るのが、斯くては形式に走つて人の真情に訴へる事は出来ない、弔文の如き殊に虚飾を忌むのである。

何人も死すれば、惜しまるれど、君の如く、何人にも惜まるゝものは、類少なかるべし、君と一面識あるもの、君を愛して措かず、君は何人にも愛せらる、君の人と爲り、快活、無邪氣、天真爛漫にして、毫もいやみなければ也。

こゝに先づ乙羽の人と爲りを論じ出したのである、其順序が、君がなせ死して惜まるゝか、これを説明するの目的に出た、これは、死といふ事を主として居るから、死から生み出した事實を以て、其人格を説かうとしたので、最も人には切實に感せしめる、即ち、君の人と爲り、快活、無邪氣と、この段を始めるの

に、是れを以てしたならば、餘りに抽象的に落ちて、人の感懐を斯くまで切にはさせなかつたであらう。

(序だから抽象的といふ詞の解釋を與へて置かう、物にはどれにも、あてはまるものがあつて、これを通素といふ、この通素を集めて一つの説を立てる、これを原理といふ、抽象的といふのは、この原理を立るやうな仕方はいふのである、例へば無邪氣といふ性質は乙羽にも相當すれば、其他一般の無邪氣な人にも相當する、即ち、罪のない、子供らしい、可愛い、性質をいふのである、斯様なものを抽象的といふ)

されど、君が世人に惜まるゝは、豈に僅に君が性質の善良なるのみならむや、君は一代の文人也、君が短き一生、匆忙の間にものしたるもの、所謂乙羽十種あり、外に歐米山水あり、其他纏まりて書物とならざる断片極めて多かるべし、紀行文また頗る多く、傳記隨筆の類一々擧げて數ふべからず、此の外新體詩をよくし、俳句をよくし、和歌をよくし、漢詩をもよくす、君の文學に於ける極めて多方面なり、君の文章、才氣煥發、詞華やかに、輕快にして趣味あり、亦一種の文章也、而して筆をはしらすこと、矢の如く、千言たちどころに成る、而かも決して粗笨ならず、才筆にして健なる、君の如きは多く、其比を見ず、君年を享けしこと、僅に三

十三、天之に年を假さば、其文益老い、其造詣はかるべからざるものあらむ、君は文人として、前途なほ多望なりし也。

前段は性質をこの段は其文才を説く、そして其筆始めが、されど、君が世人に惜しむるは、豈に首に君が性質の善良なるのみならひやと言ひ起して飽くまで前段との縁を絶たない、而かもこの段では文才を論じ、ついで享年を隠約の間に示して居る點を注意せねばならぬ。

第二十六日

叙事文 (十)

前回に引き續いて、乙羽を引ふ文の後を解説しやう、前回は其冒頭、性質、文才、著述を擧げた、こゝにそれに續いて、

君は文筆に於て才氣煥發せしが如く、人物に於ても、才氣煥發せり、君筆を執れば健筆家にして、事務を執れば、敏腕家なり、君が如何に博文館主を輔けて、出版事業に盡力したるかは、今更余が説く迄もなかるべし、君は博文館の支配人として、出版事業に於ける前途の抱負、計畫、極めて大なるものありしならむ、君は

我國の出版事業を改良せむとて、西洋諸國の出版事業を視察せむと欲して、歐米諸國を歴遊したりき、歸り來りて、未だ一年ならざるに、君早く逝きぬ、君の遺憾果して如何ぞや、君の一死は、實に出版界の不幸なり、

この一段は事務家としての乙羽を論じて、君の一死は實に出版界の不幸なり、とまで稱へた、而かもこの筆始めも、君は文筆に於ても、才氣煥發せしが如く、と飽くまで前後の意を繼承することを忘れない、即ち讀者の思想を順序よく聯絡させる法である

君がいたく美術を愛好せしは、君が慰藉の存せし所亦君が人品瀟洒にして、普通の所謂紳士と其選を異にせるものありし所以也、君は實に美術と文學とを調和せむことをつとめし人也、君又寫眞を好み、自ら之を試み、其技老熟して、最早普通の素人に非ず、寫眞を以て、山水を紹介し、風俗を紹介するの氣運をつくりしは、實に君の力なり、君既に文學と繪畫とを調和し、更らに文學と寫眞とを一致せむことは、所謂乙羽十種と、歐山米水を繙きたるもの、皆認むる所なるべし、此外、太陽を初め、博文館發行の雜誌にもあらはれぬ、殊に太平洋が寫眞を

以て社會の出來事を報道せむとするは、讀者の認むる所なるべく、而してこれ君の計畫に出で、君の力を注ぎし所也。君の美術癖は君の人品をして、賤俗の趣あらしむる一助となれると共に、またよく君をして書物の意匠體裁に凝らしめたり。殊に歐山米水に至りて、其の美を極はめたり。用紙、製本、印刷體裁など、あらゆる技術の精粹をあつめたるのみならず、繪畫寫眞と文學とを結びつけて我國空前の美本と稱せらる。君の用意多とせざるべけむや。

こゝに文を行ふ變化に就いて注意すべき事がある。この弔文の第一段は「死のはかなきを説き、埋葬の一段を記したのであつた。故に第二段は直ちに第一段を受けて、何人も死すれば惜まるれ」と筆を起し、其死の惜まるゝを其性質に歸した次に、第三段はまた第二段を受けて、其死の惜まるゝ單に性質のみにあらずして、其文才にある事を説き、筆を「されど君が世人に惜まるゝは」と前段に呼應して起した。第四段、其事務家としての乙羽を説くに及んでも亦直ちに第三段を受けて、筆を「君は文筆に於て才氣煥發せしが如く」といふに起した。そしてこの第五段になつては、其性質、其文才、其事務家としての

手腕、これ程を一纏めにして、筆の始めを前段に頓著なく、君がいたく美術を愛好せしはといふに起して、以上三段までの筆振りとは、一變化を作つたけれども、其意は以上三段を纏めたのであるから、直ちに君が人品、潇洒にして普通の紳士と其選を異にせるものありし所以なり」といひ、又「君は實に美術と文學とを調和せむことをつとめし人也」といひ、又「殊に太平洋が寫眞を以て社會の出來事を報道せむとするは、讀者の認むる所なるべく、而してこれ君の計畫に出で、君の力を注ぎし所なり」といつて居る。話説には順序がなく、てはならぬ、而し其進行が餘りに平板では面白くない、即ち斯様な變化を望むのである。

君はまた旅行家也、平生俗塵の裡に勤勉し、閑あれば、則ち山水の間に放浪す。風流の趣を解せるものと云ふべし、而して遊べば、必らず記あり、千山萬水、續千山萬水、耶馬溪、歐山米水、是也。其他乙羽十種の中にも、紀行文多く散見す。君の足跡日本の内地に普く、更に高飛して歐米の外に及べり、われ君の旅行癖を愛す。君が記行の文、詞藻に富み、才氣あり、輕妙にして面白し、而して他の旅行家の企及

すべからざるは寫眞と紀行と相一致する點に在り、其最も至れるものは耶馬溪是也、耶馬溪は頼山陽の筆によりて、世に顯はれしが、君行いて更らに其奥を探り、一々之を寫眞に撮して、世に紹介せり、君は啻に寫眞術に忠なるのみならず、また山水に忠なるものなり。

前段に寫眞癖ある事を擧げた故に、又の一字を加へてこの段の冒頭を、君はまた旅行家也と書き出して、結末を、君は啻に寫眞術に忠實なるのみならず、また天下の山水に忠實なるものなり、とし前後兩段を結論して、苟くも思想の聯絡と話説の進行順序を過らない、最も學ぶべき所である、本文は直ちに明日につづく、

### 第二十七日 叙事文 (十二)

君は都門を出づれば、飄逸洒脱なる騷人となり、都に入りては最も交際ひろき社交家也、政治家の大立物、實業家の尤なる者をはじめ、あらゆる文人、記者、學者、美術家など、君の交れる中流以上の人士頗る多く、到る處、君の知己あり、君はあ

らゆる方面の人に愛せらる、君の人と爲りも亦推して知るべし、君は才氣ありて且つ勤勉なり、君は事務きはめて多忙なるも、筆をすてず夜間わづかの時間をぬすみて筆を執り、わづかなる時日の間に、尨大なる著述をなせり、其健筆の非凡なるは更にも言はず、精力人に絶して勤勉なること、亦多しとすべき也、

前段は、寫眞に忠に、山水に忠なる事を以て結末とした、そして三段四段に於て其才氣と其事務家たる手腕とを擧げた、故にこの冒頭は、君は都門を出づれば、飄逸洒脱なる騷人となり、都に入りては、最も交際ひろき社交家也、とした、そして其精力勤勉を説いた、文章は絳々として絶えず前後の聯絡を保ち、そして變化ある處に妙がある、

君の生前、われ君の著述を批評したること多かりき、時に憎まれ口をたゝきたりき、われは平生人の面前にて悪口をいへり、乙羽君の面前に於ても亦然るものありき、されど、君が寛大の量、余の愚を容れて、餘りありき、死は人生の終也、君の一死、我をして唯哀悼の涙にむせばしむ、君の音容なほ目にあり、君の生前を思へば、欽慕の情禁する能はず、嗚呼、歐山米水は君が絶筆となりけるか、君歐米

小觀をものせむとし、口繪まで出來たるに書成らずして先づ逝きぬ、君今何處にか健筆を揮はむとする、悲しい哉、

これが結尾である、前段までを以て乙羽の性行を盡した、最後に自分と乙羽の關係を書き起した、これは遙かにこの文の冒頭第一段と呼應するのである、即ち累年の持病に弱り行く我身なほ生きながらへて平生壯健なりし君先づ逝かむとは思ひかけきやといふ一段の文句に應じて君歐米小觀をものせんとし、口繪まで出來たるに書成らずして先づ逝きぬといふ人生の頼むべからざる事に及ぶのである、随つて冒頭第一の明日知らぬ身の抽象的感懐も自ら切實を加へ來る次第である、一文の結末、君何處にか健筆を揮はんとする、あゝ乙羽の墓、日暮里村馬琴の筆塚に隣りかの馬琴逝きて後彼が健筆を見るよしもない、乙羽もかくて其健筆を何の處に揮ふべきぞ、文は隱微の間に冒頭結末自ら脈絡がある、

以上三日間に涉つて連載した乙羽を弔ふ文はこゝに一文の解剖解説を了へた、唯其叙事文として諸子が學ぶべきは話説の順序の整然として亂れない事と思想の

聯絡が如何にも棉花などから絲を引き出すやうに絶えず切れざる處にある、而かも其記す處は性格、文才、著述嗜好、交際才氣等種々に變化して居る、また以て人の傳記を作るにすぎ範例である。

これを以て叙事文説明の大略を了へた。諸子は以上の智識から左の宿題を作らねばならぬ。

一、猫若くば犬の動作を書く事

これは複雑な動作を尤も明瞭に、最も其順序の自然であるやうに書かねばならぬ。

二、夕の感想

友を想ふのでも、父母を想ふのでも、景色を見て感じたのでもよい。

三、廣瀬中佐の傳

當時の記事がある新聞雜誌を参考とするがよい。

第 三 期

第 一 日 議 論 文 (一)

道理のあるところを論述して、人の所信、行動に感化を與ふるものを議論文といふのである。まかも議論文は常に對敵態度を持つて居るのであるから、單にある事柄を解釋し説明して之れを理解せしむるといふだけでは其目的が遂げられたものとはいへない。飽くまで其説に聽き其理に服して、更に之れを信仰せしめなければ止まないものである。議論文が既に理を以て他を服し之れを信せしむるといふにあるなれば、其目的を遂ぐる上には是非とも必要であつて、また有かなくは立證である。即ち道理を論究する文章は左の二大部分から成り立つて居る。

- 一、命題
- 二、立證

命題とは事物の斷定をする事である。是なれば是、否なれば否、可なれば可、不可

なれば不可と、斯様に一つの事物に對して自分の信ずる所を明らかにする事で、この断定の是非を辯論するに道理の正否、實例の有無とを以てする、これを立證といふのである。故に議論文は之れを約めていふと、一つの命題を在存せしむるか、之れを破壊消滅せしむるかを立證するのが其要旨である。

議論文は其之れを論斷する事物の目的によつて左の五類に分つ事が出来る。是れを第一分類と名づける。

- 一、人物論
- 二、風景論
- 三、歴史論
- 四、學術論
- 五、時事論

人物論といふのは古人と今人とを問はず、ある一人若くは數人の言論行爲を尋窮し、其人物の理想性格に及んで之れを是非するものである。勿論其論すべき人物に依つて其時代を説明し、歴史を論定するものは或は時事論となり、或は歴史論

となる。風景論といふのは自然を是非して感情以外に人の理性に訴へるものといふのである。歴史論は總て史的事蹟に關する議論である。學術論は科學上の議論と詩上の議論とを併せて居る。歴史を一つの科學なりとする近代の説に従へば、歴史論もこの圏中に入るものであるかも知れぬが、分類は便宜の爲めにするのであるから、其主要なる目的によつて區分せられたものと考へればよからう。時事論といふのは政治、宗教、教育等に關する時事の問題につきて討議するものといふのである。但し以上の分類は説明の便利を計つて作つたものである、一論文を取つてこれに名づくるに其論すべき主要目的を以てすれば、之れを人物論といふとも、歴史論といふとも、乃至は時事論といふともそれは差支へない。

議論文はまた其論理の仕方に依つて之れを二つに分類することが出来る。之れを第二分類と名づける。

- 一、演繹的議論文
- 二、歸納的議論文

演繹といふのは論理學で一般より格段に入る論法に名づけた詞で例へば、人間は



凡て死を免れず、彼は人間なり、故に彼は死を免れずと論ずる仕方はいひ歸納といふのは格段より一般に入る論法で例へば「煙昇る處に必ず火あり」と論ずるが如き仕方をいふのである。

議論文の他の分類は議論のよりて来る源泉につきて之れを區別する法である。之れを第三分類と名づける。

- 一、推斷的議論文
- 二、例證的議論文
- 三、記號的議論文

一は原因結果の關係から導かれた議論文である。日露戦争は今日まで常に日本の勝利に歸して居る、其最終の勝利も日本にあるであらうと斷定する如き一度形造られた結果によつて、未來に收むべき結果も亦然りと推量するものをいふのである。二は一の人間物體が他の人間物體と或點に於て類似する處があるといふのから導かれた議論法である。例へば鶏卵と種子との如きもので其の兩者の形態からは何等類似の點はないが、共に禽鳥草木の父母となつて、是等を成さしむ

る點に於て二者異なる處がない。斯様な時は論者は一つの場合を例證として直ちに他の場合に推移するのである。三は思想の聯關から導かれた議論文である。即ち一物の記號を見て他の事物を聯想し、以て一の推斷を下すのをいふのである。例へば軍艦の司令旗によつて司令官が居るといふ事を知り、或は日本海海戦で露艦アリヨール號が其前檣と後檣との中間に萬國信號のX G Bの記號旗を掲揚したので、其降服を察するの例である。

以上を以て議論文の種類の大要を説明し得た。即ち第一分類に屬する議すべき事物の目的による各種の論文は之れを論ずる仕方に於て第二分類の何れかを用ひ、第三分類の三種論法は之れを混用して大に文の勢力を増すものである。

## 第二日 議論文 (三)

人物論には種々の種類がある。ある一人の行爲事蹟の一端を捉へて之れを是非するものもあれば、其生涯の言動によつて其理想を窮盡し之れを論定するものもある。其周密なるものとなれば、周圍の人情風俗習慣乃至は其人の境遇と運命

斯様なものを酌量して論ずるものもある。けれども豹は其一斑を以て全體を知るに難からざるが如く、ある一人物の特長が能く其全豹を覗ひ得らべき程有力なものであれば簡單なる事蹟行爲の一端を以てしても、なほ其人物全體を劈開して餘す處なきもの往々にしてある。故に人物論は其目的が人物の論評にあれば、これを論ずるに是れ／＼の要件を必要とするといふ規則はない。左に徳富蘇峰を論じた一例を挙げやう、

平民主義は果して自己の位置を作らむが爲なりし乎、新島崇拜は果して清士として世に目せられむが爲なりしか、軍備擴張説は果して薩人の歡心を買はむが爲なりしか、嗚呼吾人は萬朝記者と共に才人蘇峰の出處を呪咀せざるべからざる乎、

阿蘇山の麓より、將來の日本を懷にして東上したりし一介の措大は實に明治人文史上に一生面を拓きたりき、彼が鼓吹したる平民主義は一部青年の爲には新日本の福音なりき、其奇警なる文章、其犀利なる觀察は一世の耳目を新たにし、世人は彼に於て、其雜誌に名けたる國民の友の權化を見むことを望みた

りき、あはれ十年一日の如く、藩閥打破を唱へたる彼れ、平民主義を唱へたる彼れ、經濟的眼孔よりは車夫も大臣も均しと唱へたる彼れ、新島襄と楠正成とを並べ稱したる彼れ、あゝ、彼れは今や藩閥政府の高等官二等となり了りぬ、世は彼れを偽善者なりといふ、彼れは世を如何にせむとするか、驥は其力を稱せずして其徳を稱すと云へり、あゝ、吾人安ぞ今に於て士風の盛衰を論せむや、

これは故高山樗牛が三十年九月に蘇峰が入閣したこれを慨嘆して草した一文である。この人物論の如きは蘇峰が蘇山の麓から一片の放膽的時事論を懷にして東上してこれを天下に唱へて以來の其彼れが主義と、其彼れが當時に於てなせる行動との相違を以て彼れが人格を論定せむとしたものである。正直にいへば斯様な斷案は甚だ危険なもので、人の主義といふやうなものは要するに世に處する方便であつて目的ではないのであるから、時代の風潮と四圍の境遇によつて或は變ずる事がないともいへない。其斯様な推移する性質を帯びて居る主義なるものを楯にして、其主義を變じたから彼は偽善者であるとか、士風の衰靡であるとか

論ずる事は、之れを論ずる以前に當つて其主義を變じた理由を窮盡する必要がある。之れを窮盡せずして直ちに其主義を變じた其事柄を責むるのは少しく早計かも知れぬ。又況んや其蘇峰が入閣したといふ行動は之れを蘇峰をして説明せしむれば彼が主義なるものに於いて相排斥する性質のものでないかも知れぬ。又更に況んや其主義なるものが果して蘇峰と樗牛との間に同一の解釋が與へられて居るかどうかも疑問である。即ち樗牛を以てすれば主義は處世の目的の如く、余を以て見れば主義は處世の方便の如く、蘇峰をしていはしむれば其何れに與みするかも知るを得ないのである。斯様に不確なる前提を土臺として勝手な論斷を下すことは論理上からは不都合かも知れぬけれど、諸子が學ぶ議論文は決して論理に合するや否やを以て之れを標價するのではなく、諸子の學ぶのは文章であるから文章の善惡を以て之を是非するのである。其論理に合一するや否やの如きは附隨し來る要件に過ぎない、即ち論理の如何に關せず完全に意思の表示せられたものであればよい。

## 第三日

## 議論文 (三)

前回には、一動機、換言すれば、一行動を以て之れを土臺とした人物論を挙げた。こには全般的に、或る人物を抽象的に論定した例を挙げやう。

黒田侯は政治家としては甚だ野心少なく、且つ政治家に最も必要なる強固なる意思を缺けり、侯は明晰なる頭腦を有し、緻密なる判断性を具へたる人物なりと雖も、天性消極的にして難局に當るの膽勇なきが故に到底貴族院議員以上の責任に堪ゆべからず、侯は寧ろ學者肌にして政治家肌にあらず、之れを近衛公に比すれば、薄志弱行にして、之れを西園寺侯に比すれば、無策無略なり。近衛公は意を以て勝るの人なり、西園寺侯は智を以て勝るの人なり、而して黒田侯は情を以て勝るの人なり、其性格人物各々相異りと雖も、共に華族社會の秀才として各々一方に異彩を放てり、唯西園寺侯が既に伊藤侯と俱に政黨に入らむとして尙ほ躊躇し、黒田侯の漢焉として殆ど時勢に關せざるもの、如き是れ華族の勢力を政治上に發展する所以にあらず、余は此の點に於て西園寺

侯の明快勇斷を稱せずむばあらず。(明治十四年三月鳥谷部春江)

斯様な論法は議論の性質上至つて薄弱なものである。即ち黒田侯は、明晰なる頭腦を有し、緻密なる判斷力を具へたる人物なりといふとも、之れを立證せざる間人は容易に首肯し難からう、又侯は、難局に當るの膽勇なしといふとも、何れに見ても、未だ斷定したのか、要するに本論の前提は皆獨斷に出でた勝手な斷案であると思ふより外はない。故に斯様な議論文に對する讀者は豫め其前提したる斷案だけには盲從せなければならぬ義務がある。未かも亦一人物論の範例として差支へない。

時平の人物を考ふるに才氣あり、膽氣あり、熱血あり、豪邁にして敏捷快活にして淡泊伶俐にして果斷凜手として且つ洒然たる大丈夫也、時平は笑癖ありき、以て其無邪氣なりしを知るべし、或時清涼殿にて大雷あり、これ道眞の怨靈の所爲なりとて人皆懼伏しけるに、時平獨り驚かず、劔を抜いて檻外に立ち、天を仰いで罵りて曰く、咄々、卿は生前我が下に位したりき、死せりと雖も、この世に在つては、我に一步を讓るべき也、とこの一喝に雷やみしとぞ、亦以て其毅然たる

る豪傑肌の貴公子なりしを知るべし、唯惜むらくは天此英雄に年を假ざりしことを、もし今二十年も生きのびたらむには、更に一層赫々たる治績ありしなるべし、當時人相を見るものあり、時平を相して曰く、賢慮國に過ぐと、道眞を相して曰く、才能國に過ぐと、時平の弟忠平を相して曰く、智慮才能國に叶へりと、國に過ぐとは、日本のやうな孤島には大すぎて勿體なしと也、今日の用語にて言へば、大陸的なりと也、この事、古事談に出づ、眞偽知るべからざれども、よく三人を品評し得て當れりと云ふべし(筆のまづく)

これは大町桂月が藤原時平を論斷した結末の一節である。こゝに時平を評して、才氣あり、膽氣あり、熱血あり、云々といへるのはこの論文の初めに於て、其事實を一々に擧げて其人物を論評して、これを總括して抽象的に論結したのである。かの黒田侯を論じたものと其趣を異にする、唯紙數に限りがあつて、藤原時平の論全體を掲げることの出来ないのを遺憾とする。今其前論の一節を擧げて之れを例證しやう、

天下太平にして國富む、奢侈の風自から起らざるを得ず、時平は之が矯正策を

苦慮せり、或時、時平非常に美装して朝廷に出でしに、醍醐天皇見て之を叱り給ふ、時平平身低頭して家に歸り、門を閉ぢて謹慎すること數十日、百官傳へ聞き、て、奢侈の風自ら改まれり、これ實は時平が天皇と申合せて爲したる狂言也、誰とても奢侈の害を知らざるものはなければ、己の金と力とあるまゝに奢侈を極めて不品行をなし、而して上の好む所、下益々甚しきを顧みざるが常なり、時平は藤原氏の長者となりて、如何なる榮華奢侈をも、極め得べき身なるに、儉素自ら奉じ、率先して奢侈の風を停めぬ、古大臣の風ありといふべし、

斯様に其人物を洞見するに足るべき事實を列舉して、其他政治上の功績武事に留意したる事、及其情熱の人なりし事、等史上の事實に徴して、一々に其人物を證據立てた上、かの論法を下したのである、であるから如何に時平を批難し、貶せむとする人も同意せざるを得ないやうに、論じ來つたつて、寸分の隙を作らない。この論法を歸納的といつて、例證的、議論文の上乗とするのである。

宿題 足利尊氏を論ず

要件は一、論理の歸納的なること、二、論法の例證的なる事、其口語體なると文章體なるとは問ふまでない、唯踏襲と論理の一貫しないのとは取らぬ。

第四日 議論文 (四)

風景論は甲所の風景と乙地の風景とを比較評論するものもある、又ある一地の風景を單に是非するものもある、又ある花とある草とを較論し、四時の好惡を論じ、花月の勝敗を論ずる等、其趣向は種々あるであらう。

月は四時共に佳なり、春の朧月花林を照らすもよく、秋の澄みたる月尾花の末に出づるもよし、冬の小さくして、高き月寒光を放つて白雪と映對するも亦惡からず、されど、余は最も山間の夏の月を愛す、浮世の蚊も炎熱もなき處、四面蒼蒼たる中に清涼滴るばかりの月に對すれば、うれしきが如く、また悲しきが如く、一種の情味胸に充ちて、快言ふべからず、筆のしづく、桂月

是等は四時の月を其感情から好惡し比較評論したのである、諸子この例に倣つて宿題 四時の花を論ず

といふのを作つて貰ひたい。唯花には色彩が主となつて居るから色彩論も加は

る事が差支へない、又草と木との相違もあるから其甲乙憎惡を論ずるのもよい、参考までに色彩の憎惡を論じた短文を擧げやう。

色彩の中にて、余は黄色を好まず、山吹の花、黄菊の色、さては黄金の色など、多少輕薄の氣あり、赤色は俗氣あり、紫はいや味あり、青き色にてこそ最も詩趣あれ、空の色、海の色、若葉の色、多少異なる所あれども、概して青色なり、余が山間の夏の月を愛するは畢竟するに青色を愛するが故なり(同)

固より感情から割出した言である。諸子亦各其憎惡があるであらう、理を以て論ずべきものでない。

こゝに日露戦争を自然的より觀察した一論文がある、これまた風景論の一種である。

顧ふに日露の戦争を自然的より觀察すれば、山岳帝國民と、平原帝國民との競争なり、言ふまでもなく、露西亞は世界稀有の大平原國なり、其歐露二百十萬哩餘の内、最高頂と稱するは僅にバルダイと稱する丘陵のみにして、其高さ微に一千尺を超えず、他は廣大なる版圖皆砂原茫茫々相連るか、沼澤濕地相望むに過

ぎず彼のスラブ族は、實にこの殺風景の間に生育せり、故に日露戦争は我が山岳によりて養はれたる高潔優美にして、しかも氣骨稜々たる國民と平原によりて育てたる豪放粗野にして無風流なる國民との競争なり、斯くの如く兩國民は、その自然に於て、已に乖離す、今や、我壯丁は山國氣象を發揮し、不動如山の態度を持して、漂泊無定的なる敵を驅逐せり(矢津昌永)

國民の氣風を地理的原因に歸するの亦一つの觀察である、實際風土は大に人を感化するもので同じ一縣一地方のうちにあつても、急流に従ふ處の民と緩流に従ふ處の民とは其氣風を異にする位である。諸子はこの筆法に従つて、

宿題 風土と人民との關係を論ず

といふ一文を作つて送られたい。それは自分の地方と又全世界とを問はない、例へばヒマラヤ山を以て限られた東北方の支那の民と南西方の民、印度の種族とが全く其性質を殊にして前者は理論的で實際的で孔子を出すやうな、政治的の民であり、後者は冥想的で釋迦を生むやうな、宗教的哲學的の民である事を論ずるのによい。又日本海岸の民と大太平洋岸の民と乃至は瀬戸内海に面する民と又た其性

質を異にする理由を地理的に論ずる事もよい。この文を作る参考書としては、志賀重昂の日本風景論などはよからう。なほ風景論は例擧すればいくつもあるが、既に叙事記事に於て景色には力を注いだから以て諸子の力はこれを比較論斷するに適したであらうと思ひ、これに止める。

第五日 議論文 (五)

歴史論は史書、古器物、口碑等を材料とし考索するは勿論其正史の裏面を知るには小説、物語乃至は流行謠、童謠等を仔細に研究した結果でなければ正確な論據は出来ないのである。けれども一片正史をのみ事實としてある歴史を論ずる事は敢て差支がない。既に歴史中の人物となつた人はこれを論じて或は人物論ともなり或は歴史論ともなる。其目的が人物の面目を明らかならしめやうといふのと史蹟を正さうといふのとで違ふのである。

世の史家概ね曰く、奈良朝の文物は漢竺の模倣のみ、唯夫れ平安朝に於て初めて日本固有の面目を見得べしと、予の見たるところ聊か是に異なるものあり、蓋し

國民の性情古と今と素より同じからず、特に何れを以て固有とすべきかは暫らく別箇の問題となさむ、唯若し吾人の祖先が古代に於て有せし所のものを以て我國民本來の特性と爲すべくむば、奈良朝の文物の如きは最も明かに是の特性を表現したるものと謂ふべし、試に見よ、奈良朝の佛教は平安朝の佛教の如く厭世趣味を帯びざりき、其轉讀せられし經典の最も重なるものは金光明經と最勝王經となりき、聖武天皇が總國分寺として東大寺の大造營を企て給ひしも、其目的は國家鎮護にありき、畢竟奈良朝の佛教は現世教なり、而して現世の福祉以外に求むる所無きは古事記、風土記、祝詞に現はれたる日本民族の特性にあらずして何ぞや、奈良朝の文學は萬葉集を以て其代表者となす、而して萬葉集收むる所の和歌は、格調雄大、氣象剛健、其情緒は快濶にして和樂也、是を古今集以下の歌集の纖弱憂鬱多く、婦女子の涙痕あるものに較ぶれば、果して孰れか能く我が祖先の性情を發揮せるものぞ、予曾て古事記を讀みし時、其歴代の歌謠一として花鳥風月を歌へるもの無きを見て、本邦固有の性情が平安朝以下の文學と甚だ近からざるものあるを思へり、予は萬葉集に關して

精緻の研究を遂げたる者に非ずと雖も、其歌咏の中に花鳥風月の小題目に拘泥せるものとは、予の曾て記憶せざる所也。果して然らば奈良朝の文學は最も我が祖先の性情を代表せるものに非ずや。(樗牛全集中より)

これは高山樗牛が、笹川臨風著「奈良朝史」の首に書したものの、一節を抜いたのである。即ち人心の根柢を最も深刻に支配する宗教と、又其衷心から流露した時代時代の和歌とこの有力なる二材料を基礎として奈良朝文物を漢竺の模倣にあらず、日本固有のものであると論定したのである。總て史論は斯くの如く其論旨を強固にする爲めに最も有力なる材料を論據とせなければならぬ。故に史論は殊更ら立證を明瞭に確實にする必要がある。歴史は事實を記載するものである。抽象的の議論の如きは既に史論とするに足らない。序に史論に就いて一言して置くが曾て二十六年の頃であつたらう、重野博士は、抹殺博士とまでいはれた位で、山本勘介、諏訪吉直、櫻山茲俊、兒島高德、武藏坊辨慶の如き人物は假設的人物で實際に居なかつたといふ異説を立てられたとあるものは、古代の忠臣義士にして教化に裨益あるものは可成之れを庇保すべきであるとか、史書必ずしも完璧でないから五

六の史書に見えないからとて、之れを抹殺するのは穩かでないとか云ふ説もあつたが、是等は固々歴史研究上の問題と、倫理風俗上の問題とを混同して風俗上より史家を攻撃したもので、史學研究の妨げになるばかりである。歴史は飽くまで事實の研究であるから事實の外他を顧慮する要はない。諸子にして楠正成が嫌ひなら直截に之れを論ずるがよい。敢て足利尊氏の像を鞭つもの必ずしも忠勇者であるまい。

### 第六日

議・論・文 (六)

學術論はまた史論と共に専門の學者が任すべきもので、詩、文、哲學、宗教上の問題は勿論科學上の問題といふとも相當の智識と見る處がなければ論斷する事の出來ないものである。けれどもまた小文學論、小科學論を研究するの材料として一例を示さう。

古書之愛重すべきは、幾多の生存競争を経て今日の適種生存の證明を留むるが爲めのみならず、博士アルノルハ曰く、若し學校より希臘、拉典の古文辭を驅



二〇  
 逐せん乎、是れ恰も上古數百載の世界に於ける經驗を切斷し去り、人類をして近世に突如として發生せしめたるの狀態に措くものなりと、若し之を知言とせば支那の古文辭を藐視す可からざる理由も、亦分明なる可し、吾人は此古文辭によりて離隔したる世界と消息を通ずることを得るなり、吾人は古人の經驗を利用し、其足跡を辿ることを得る也、故を温ねて新を知る是れ人生學問の工夫也。(日曜講壇、徳富蘇峰)

これは蘇峰が文學としての論孟中から抜いた一節である。即ち餘業として手を文學に觸れむと欲する人の爲めに論語、孟子、左傳、史記の類を推薦した其理由中の一節であつて、寛厚、平正の心を以て古人を千載に尙友する事を得るものだからのである、而して更にこの書を推薦する理由を論じて居る。

凡そ世には、二種の智識あり、第一は組織的、系統的、論理的のものにして第二は聰慧、賢明なる大人が、其人に交り、世に接し、其の觀察、閱歷、幽思、靜想の際より得來りたる智識にして、所謂コレリツジが非常なる程度に於ての常識に外ならず、吾人は論孟の書が、第一の智識を供給するに於て不足するを自狀すれども、

第二の智識に於ては、殆んど之を汲んで盡きざる泉源たるの看を做さずむばあらず、ジョン、ラボック曰く、英人にして論語を讀むもの、失せざるもの殆んど稀なるが如しと、惟ふに是れ未だ喫して其興味に達せざるが爲めなるなからむや、所謂無量の崇見、無限の深慮、之れを片言零句の中に約し、人をして三唱三嘆、身を終る迄之れを服膺し、忘れむと欲して忘るゝ能はざる教訓に至りては、吾人は實に此の中に求むるの最も安全なるを見る、吾人が特に世務に匆忙にして、文學の研修に餘裕を缺く人士に向て、此書を推薦するは此が爲めのみ。斯くの如きも亦學術論として見る事が出来る、即ちこれに準じて諸子は左の宿題を草し得るであらう。

宿題 書籍の選擇法を論ず

其理由は簡單でもよい、其論法の如何も問はない。

史劇とは我が所謂活歴劇の如く、正史若くは野史の事蹟を只そのまゝに按排して、正史の地の文を科介に改め、人物の語を的として劇に物したるに非ず、さりとして近松等の淨瑠璃の如く、元和を建仁とし、家康を時政とし、擅に史上の名

稱を用ひて、擅に立案構思せるもの、即ち詩想の自在を得む爲めに名のみを過去に借れる空想の作を、正當の史劇とは稱すべからず、前者は劇詩として取るべき所なく、後者は劇詩としては或は取るべきも、史としては一分の取るべき點も無きに似たり、詩は史の侍婢にあらねども、史も亦詩の爲めに濫用せられて、故なく其名稱を犠牲にせざるべからざる約束なし、史學上に寸効無くして擅に史と稱する亦一種の妄稱ならむ。

これは坪内逍遙が、史劇に就ての疑ひ中に載せたものである、これらの問題は諸子に向つて少しくむづかしい、またこの論に對しても世間種々の議論ある處である、唯これは其漸く専門に渉る學術論の一例と思へばよろし。

### 第七日 議論文 (七)

時事論は時事問題につきての所論である、既に時事であるとするれば、政治も時事なり、文學も時事なり、宗教と諸般の業と、法律とを選ばず時事問題は多様多面である、故にある時事問題は人物論となる事もあらう、あるものは學術論となる事もあ

らう。又あるものは風景乃至歴史論になる事もあらう。茲にこの分類を作つたのは最も諸子が其時に際して創作するの必要を思ふたのである。時事の中に就きて政治論の如き日々新聞紙上論説欄に見る處であらうが、必ず注意して逸せないうやうにせなければならぬ、故齋藤綠雨は最も惡罵を極めた人であつた、其罪々刺々といへる雜筆中に當時の政黨を罵詈したものがあつた。

○現時の政黨は、一の商賣なりといふにあらすや、さらば其宣言書の、彼此共に異なるなきを嗤ふを要せし、各々様御機嫌克くの引札に過ぎざればなり、利をかゝげて勧誘に力むるを嗤ふを要せし、何日間賣出しの景物に過ぎざればなり。

○無鑑札なる營業者を、俗にモグリと謂ふ、今の政黨者流は皆このモグリなり、鑑札無くして賣買に従事するものなればなり。

○正義を唱ふるの士は、正義を行ふの士なりと思へ、公德の缺乏を慨する者に、して一己私徳の上にだに缺乏せる者あるを思ふことなかれ、要は唯信するに在り、信するはめでたきものなり、天下太平の策こゝに於てか定まる。

これ亦一種の議論である。議論必ずしも三段論法でなければならぬ事はない。

斯くの如き議論法は盡く其前提を省略して單に其斷案をのみ掲げたものと思へばよいのである。

二四

近來學者小説家の狂氣するもの續出す皆是れ幾多の原因あるべしと雖も其の遠因たる蓋し腦力を多用過働して身體の營養は頭部のみに消費せられ、而して遂に骨肢に及ばず、全身愈々衰弱瘦耗して神經益々過敏となり居る折しも會々何にか近因に逢遇するや、さなきだに過敏なる神經は忽ち激動して遂に狂人となるもの即ち是れなり、既に然り能く之れを豫防するの方策は如何、曰く食物曰く運動、食物は世人が其衣服に奢る所の資料を擧げて之れを精良なる食物を得るの資料に投ずるにあり、運動は世人が室内のみにて遊戯する事を停止し成るべく戸外の運動をなすにあり。

これは志賀重昂が論じた一時事論である、余は諸子に斯くの如く平易な筆致を學ばむとを勧めるのである、其論法の如きも最も普通で敢て奇を弄するといふでもなく、わざくむつかしく書くといふでもない、まかも其意が能く通じて、誰れにも會得せられる。推斷的議論文として最も正鵠を得たものである。

海軍擴張は一般に不人氣の問題といふ可らざるも、當時に於ては決して國民の熱心を衝起する程の魔力を有せざりき、何となれば戰役經營以來國民は既に軍備擴張上食傷したればなり、而して國民の一半は確かに軍備擴張を以て過大視したればなり、而して日英同盟締結の如きは、却つて一部の國民には安心を與へ、此上軍備擴張などは贅澤の極なりと思はしめられたれば也、民は與に成るを樂む可く、借に始を謀る可からずとは、そは豈に多少の眞理なからむや、(近時政局史論、一節、蘇峰)

海軍擴張問題を論じた冒頭一節である。まかもこの一節がまた一個の獨立した論文として見られるのである、志賀、徳、富の外に議論文として、時事論家として諸子が最も學ぶに適當なのは、島田、三郎の文である。三郎の文は叙論交遞であつて、叙と論と交互に最も入り易い論文體である。

### 第八日 議論文 (八)

以上を以て文例の大體を盡した、こゝで論文の作法を教へやう。議論文には呼

二五

吸があるなせなれば論文は對敵行爲ともいふべきものであるから、敵手の如何によつて虚々實々大に戰の法を講せねばならぬ、即ちあるものは迂餘曲折、硬軟の文字を錯綜して、隱微の間に鋒鏃を露すもの、又あるものは直截簡明、矯激の文字を並らべて疾風迅雷耳を掩ふに遑なからしむるもの、皆對敵手段として其敵次第で兵の用法を變へねばならぬ、然し孰れも敵の灸所に針錐を下すに至つては同じである。唯一つは眞棉花まわたで首を緊るといふ仕方、一つは腦天から玄能を被ふせるといふ仕方に過ぎない。處でこれを如何に用ふるかといへば、敵手が熱烈火の如くになつて怒氣紙面を覆ふ時、こちらは冷然として幾等か嘲笑的態度を保つて大に大人振るのである。若しまた敵が言議の世人を過り人を傷くるに至つた時は最早猶豫すべきでない、憤然痛棒を加へて正面から叱責する、そうして斯くの如き輩に向つて何等の遠慮何等の假借することを要せない。

唯何れにしても議論文は精神一貫して勇氣充溢して居らねばならぬ。或る場合の如き少々不穩當の字句のある事も差支へないから言はむと欲する處は飽くまで盡すといふ決心でなければならぬ。徒らに文字の末に關つてその實を失き

やうでは議論文は駄目である。即ち文章を以て議論を作るのでない、議論を以て文章を作るのである、故に議論文は字々句々肺腑より出で、熱血を以て綴り成したものでなければならぬ。彼の諸葛武侯一篇の出師の表はなせに千古不磨の大文章として支那の文學國を以てして特に推重せられるのであるが、唯一つ武侯が満腹の心意氣が這入つて居るからである、議論文は宜しく文章を書くと思はず常に出師表を作る氣であればよい。即ち一氣呵成に書き去るがよい、筆に任せて書く時は想を鍊る遑がないなどと言つて居るやうでは到底議論文は出來ない、人の同情を以て迎へらるゝやうな文は出來ない。

まかし以上の説明は實際の對敵行爲に出でた時の事を説明したので、兵隊がいづも戦線に在るが如くなるを得ないやうに、論文を草する者も、いづも満腔の心意氣のみを以てする事は出來ぬ。心意氣は作つて得らるべきものでなく、機に觸れて動くものであるから平常は先づ練るといふ事が必要である。即ち兵士の練兵を要するが如きものである。既に文章であり、藝術である以上は少くとも之を文章として研究する必要がある。それは毎日の時事世事を説く新聞の論説に注意

二八  
 することゝ怠らぬやう勉めねばならぬ。これ一つに其識見を養ひ傍ら其筆致を學ぶ所以である。

處が當今の文體は雜駁で、和漢雅俗の混合殆んど一定する所がないが、議論文に至つては最も漢文體が適切である、又能く論旨の肯綮を得る事が出来る其漢文の性質が卒直勁健なる所誠に能く議論文の特色に呼應して最も人を動かすに宜しい、彼の冗漫に流れ易い和文の如きは寧ろ議論文として成効するかどうかを疑ふ時もある。唯文學上の議論の如きは坪内博士の如く平易にして趣味あるものを選び、社會に對する注意論の如きは瘁い處へ手が届くやうな黒岩涙香の如き文を推す。又人を痛罵するが如き場合は或は徳富蘇峰の針を持つやうなそして明晰な文がよからう。若し一個の政治論に至つては陸羯南の如き朝比奈知泉の如き、三宅雪嶺の如き莊重質實で而かも勢力を有する文體を薦めるのである、諸子はよろしく其好む處を學ぶがよい。

第九日

解・釋・文 (一)

解釋文といふのは事理を説明するもので、智識と説明とを與ふるを以て目的として居るので多く科學に用ひられる。記事文、叙事文の感情想像に訴ふるに反して、これは常に理解に訴へるのである。さうして等しく理解に訴へるものに議論文があるけれども、議論文は飽くまで信仰せしめねば止まないが、解釋文は單に了解せしむるを以て満足するのである。唯注意すべきは解釋を飽くまで眞實でありのまゝを説明する外自己の意見を加へる事を容さない。

白痴といふ決して一様ならず、或は強度の電氣にも感應せざるまでに觸覺の缺乏したるものあり、或は何の意味もなく、自己の頭部を柱に打ち付ける負傷するも顔色變せざるものあり、之れに反して或る局部の感覺非常に鋭敏にして、輕微なる物體に觸接するも激痛を感じて叫喚するものあり、特に奇なるは發砲の響を聴く能はざるも、胡蝶の羽音を聴き取るものあり、馬の駈ける聲、車の軋る響をも感ずる能はずして、尙ほ能く渴ける時にコップに水を注ぐ音を耳にするものがあるが如き是れなり、更に太甚しきは疾病の故にあらずして手足を動かすこと能はざるものあり、たとひ之れを動かすも不規則にして整調を

失へるものあり、又言語の能力なきは一般白痴の特徴なる如くに、數理の觀察は亦白痴を通じて缺乏せるもの、如し、(白痴とは何ぞや、鳥谷部春汀)

斯の如きは純然たる解釋文である、解釋文の特性は眞實なること、公平なること、偏見なきこと、誇張なき事、虚飾なき事、擬勢なき事等である。

白痴は其種類によりて其状態に多少の差異あり、固より一様に觀察するを得ざるのみならず、白痴の間には間々一種の天才を表視するものなきにあらず、例へばクレチニズム性白痴にして猫を畫くに妙を得たるものあり、其畫きたる猫は歐洲各國の美術館に陳列せられて、美術上の逸品なりと目せらるゝといふにあらずや、又石井亮一氏が米國に於て見たる一白痴の如きは、機關車の構想に精通し、他の一人は船舶の構造を熟知し居るは勿論、其の自ら製したる模型は頗る綿密精確なりしといふにあらずや、又現に瀧の川學園の一白痴の如きは自己の郷里より上野までの各停車場を、唯だ一回の汽車通行を爲したるのみにて能く之れを記憶するものあり、故に白痴は總べて一の能力を有せずと斷定すべからずと雖も、白痴の白痴たる所以は、神経系流の中樞に異状を

生じて、感覺神經と知覺神經との連絡を失ひ、爲めに外來の刺激も腦髓に反應を記す能はざるに在り、但し均しく白痴なるも、其の度合の重きものあり、輕るきものあり、重きものは全く無神經、無感覺の状態を示すと雖も、輕るきものは通常人と甚だ相遠からざるものあり、要するに白痴と愚鈍との限界を分つことは極めて困難なり(同)

これらの如き幾分議論文に類する處がある。即ち幾分の個性を交へて居る處もある、言を換へていへば讀者の想像感情に訴へむとして、何々するにあらずやといふが如き口吻を用ひた處がある、けれども其目的は人をして單に白痴の何者たるかを理解會得せしむればよいのである。敢て此説を信仰せしめむとするのではない、さすればこの文の如きまた純然たる解釋文といふに差支ないのである。殊に解釋文は其説明を眞面目にせずして、或は記事を交へ或は叙事を交へて之れを打つけて内面より述べるやうな場合は少くない。

第十日 解釋文 (三)

又一種の解釋文がある、即ちある書の解題をするが如き其一例である。由來講義といふ事は餘程至難の業で誰にでも解し易く誰にでも會得せられるやうにするのが講義の目的であるにも拘はらず、講義却つて講義を要する如き場合が甚だ多い、今最も解し易い森田思軒の解題を列舉しやう。

第一に其書の何物たるかを語る事なり、例へば詩經なれば是れは三千年前周の代の各國のはやり歌及びさまざまの公の式會に用ひし歌等を集めたる者にして早くいはゞ馬子歌、益踊りの歌、端唄とゞ一、オヤマカチヤンリン、君が代、進めやゝ等を雜纂したるやうのものなりとの旨を分解し、孔子に至りて其のあまりにきたなく父子の間には口にし難き、因州因幡隣り座敷をのぞいて視ればの類を剛りし事、只だ一片の俚謠も年所を隔てゝ古びるに従ひ一種のオソソリテを生じ士人の應對にも其の一二句を援て談勢を助けしさま恰かも我邦の舊謠いろは短歌等が屢々士人の口に上ると相同じかりし事又職會の席などにて主客が其の場合と境遇とによりて其旨意の略ぼ似よりたる一二章を假り來り之を誦して以て述懐せしさまは我邦にて祝儀不祝儀にウ

タヒをうたふと相同じかりしこと、各地方の歌を集めしものなるが故三千年の昔交通不便の日にありては、之に熟すれば自から難波のあし伊勢の濱萩など草木鳥獸異りたる名をおぼゆるに都合よかりしこと、孔子が手を入れてより益々社會に重せられて終には道德の標準とまで仰がるゝに至りしこと等詩經の本色本質及び其社會に何程の關係ありしといへることを明白に簡易詳密に講説するなり。

斯様な例は解釋文として最も貴ぶべきものである、解釋文の目的は讀者をしてある事項を了解せしむるにあるから其備ふべき性質は明晰でなくてはならぬ。これは固より言を待たないところ、曖昧な解釋といふやうな事は自家撞着の甚だしいものといはねばならぬ。さて如何にせば例の如き明晰なる解釋文を得るかといふに、第一が晦澁な言語を使はぬやう、少し解し難い事柄は詳しく説明し、曖昧なものは用ひないやうにする。また二様の意味に取られるやうな語句は、其義を明かに示して句節と句節との關係も明かにせねばならぬ。

雜貨を小間物といふは高麗物なるべく、古くは狛物とかきたるも見えたるは

高麗を舶とかくことの例珍しからねばなり、近頃にては唐物といふは三百年この方長崎貿易の影響なるべし、さて我が雜貨製造の進歩は高麗はいふまでもなし、唐土をさへも技巧に於ては軼過するさまとなり、南洋など一般に我が供給を仰ぐに至らんこと目前なれば、日本物といひて雜貨の義となる事遠からざるべし、但だ我が雜貨を輸出して東南洋各港に散ずるは支那人の手を假る事十に九なりといへば日本物たるべきものが永く支那物にて行はれんこともあらば殘念の事なるべしと越俎の苦勞もせらるゝなり、(涙珠唾珠)

この例の如きまた議論文に似たるも、實はその解釋を助けむが爲めの方便として、日本物云々の事より支那物云々の事に及んだのである。其目的は飽くまで解釋であつて、論文ではない。唯解釋文は多く無味乾燥なる説明に止るが故に、之れを幾らか興趣を加へて記さうとすれば、勢ひ叙事的口吻の加はるは免れぬ事である。この例恐らくは其意に出でたに過ぎまいと思ふ。

第十一日

叙・事・記・事・を・交・へ・し・文 (一)

本期に入つて特に記事叙事を混じた文例を挙げ且つ幾分の漢文臭を加へた筆致を示さう。

吾育ちし家は熊本の東郊、詔麻の平原に立てり、門を出づれば、十里の平蕪望盡くる所、即ち阿蘇の連山なり、余は日夕阿蘇を仰いで長じぬ、

(冒頭に吾育ちし家の位置を説き更らに阿蘇山と吾との關係を説いた、即ち

本文の目的が阿蘇山の記事自己の叙事にあるのである)

晴れたる日、門を出で、東に向へば、地平線と碧空との間に、展風の如く堆起する阿蘇の山色、十里を隔て、明らかに眉端に落ちぬ、其赤く禿げて骨高なる稍々不規則なる圓錐鋒の、左右に波濤の如き連山を控へ、昂然碧空に倚つて、東肥の野を俯瞰し、青天に向つて千秋の煙を嘯く雄姿を仰ぐ毎に、余は未だ曾て其堂々たる威勢にけをされて、眞に、壽安鎮國の山也と感せずむばあらざりき、

(阿蘇を説く單に其形のみを以てせずして之れに己の感想を加へ、甫めて其山の雄姿を忍ぶ事が出来るのである、叙事抒情の文は文章中最も高尚な位置にある事は人間内奥の神祕を剔り出すのによるのである)



阿蘇は實に余が生活の一部なりし、春霞訥麻の原に立ち渡る日、幼き子が畑の畔に蓮の花土筆野びるを摘み倦みて、草臥れし背伸す時、一里榎熊本城より一里を表すの梢に綿の柱の如く立ちあはるゝものは、阿蘇の煙なりき、秋老いて黒みがちなる桑の葉がさく、晚風に鳴る頃、父上に躑きて屋敷まはりを爲すとして、夕日に明るき東の空に皎々として眼を射るものは、阿蘇の初雪なりき、冬のもなか、阿蘇の氷柱の谷、雪の峰より吐き出す寒風は、飄々十里の平原を吹き通して、庭掃く僕を、エエまた無鹽の風がと身震せしめたりき、夕立の雲起るにも元朝の旭を拜むにも、暑きも、寒きも、向ふは即ち阿蘇山なりき、時々は見るに慣れて阿蘇を思はず、然れど眼をあぐれば、見よ、阿蘇は常に吾に向ひてありき

(叙事文中に言語を挿入するのは餘程巧みでない、と折角の興を毀はし文の進行を妨げる、エ、また無鹽の風がの如き一言實に全文を活躍せしめて、髣髴として庭掃く僕を眼前に見、十里の平原を吹く寒風を忍ばせて感愴誠に切である、)

朝日を負ふて薄紅に、夕日を抱きて紫に、春の露、夏の雲、さらぬだに稜高き赭色、秃骨の山の青空に映じて、愈々明らかに一皴一稜も數へつ可き秋の夕日、光まばゆき雪の花を輝やかす冬の最中、晴朝、雨日、余は阿蘇を望む實に十餘年の長きに及びぬ、然して余は未だ阿蘇を知らざりしなり、

(阿蘇を望む十餘年の長きに及び然して余は未だ阿蘇を知らざりしなり、この文が突如としてあつたのでは其感興も亦甚だ突如たるものがあつて面白くない、前段、時々は見るに慣れて阿蘇を思はず、されど眼をあぐれば、見よ、阿蘇は常に吾に向ひてありきに相呼應するのである、これあつて初めて突如の感を起すことがない、燈臺下暗らし、眞に斯くの如き事實のあり得るものである、そうしてまた、この一段の結末は前段の結末と共に本文の冒頭、余は日夕阿蘇を仰ひて長じぬに應じ、また第二段の結末、眞に壽安鎮國の山也と感せずむばあらざりぎに應ずる、斯くて四段の各結末は互に相呼應して一種の韻文的散文のやうな形をなした)

## 第十二日

叙事記事を交へし文 (三)

三八

文は前回に續くのである。朝の阿蘇、夕の阿蘇、そうして四時の阿蘇を説き來つた、更に阿蘇の特色を描かねばならぬ。

余が幼きや、彼の重疊たる連山阿蘇を中心として南北に波濤の如く蜿蜒し、平原を限りて天に聳るを見る毎に、常に思ひぬ、彼の山は國の果なるか、彼の頂は地の果なるか、彼の山の奥にはものなきか、彼の赤き骨山の中には何ものあるか、と余が八九歳の秋なりき、一日阿蘇大に荒れ、鐘ふりぬ、時に眞晝の頃なりしが、忽ち日蝕の如く眞闇くなり來り、人皆燈を點じて家に籠れり、夕に到りて見れば、硫黄の氣芬々として鼻をつき、滿庭の黒雪深さ寸にあまり、灰色の築山に灰色の松を見き、また曾て大根乾つゝありし老僕の東を望みて、ア、また御山が荒るゝ、哩と呟やきしを聞き、急に庭の築山に上りたれば、平生白き綿の柱の如く軟らかに立ち昇りし煙の今日は天を焦さむ勢劇しく眞黒に渦まき上り、時々新に勢を添へて凄まじく吹き出づるを見き、斯る後には、阿蘇より流る

る白河の水鉛になりて、鮎鯉などの死して浮み下ることありき。

(餘り變つた事は却つて平氣に言ひ去れる處に讀者を驚かす場合がある、阿蘇の疆りし光景を描いて、人皆燈を點じて家に籠れりといひ、そうして何等其悽慘たる多くの形容を費さない、唯硫黄の氣芬々として鼻をつき、人に一種の恐怖を喚び來つて、まかも其下文は至つて平氣である、滿庭の黒雪深さ寸に餘り、灰色の築山に灰色の松を見きと叙し去つた、この恐るべき事柄を其結果より見て敢て其こゝに至れる經路を詳記しなかつた處に筆致の、大なる味がある。)

曾て家婢の余に語りけるは、彼山の奥には火の燃ゆる所あり、其所に一つの橋あり、善人登山すれば無事なるも悪事をなしたるものは山神様が其橋より御返しにならぬと、而して余が家に平生意悪き女ありしが、他の朋輩の阿蘇登山に行きし時も、獨り言を左右に托して行かざりき、また聞きぬ、彼山には硫黄の表かへる池あり、採るもの足駄を穿き船に乗りて之を採るに、往々船沈んで人爛れ死すと、余が幼なるや、阿蘇は余にとりて一の恐怖なりき、其赤き山を望み、

三九

其立騰る煙を見る毎に、彼山には地獄あり、煙は地獄の火なりと思ひぬ。

四〇

(迷想の恐怖と、幼時の畏れとを以て、却つて阿蘇の噴火山が如何に凄惨たるかを説いたのである、其記事若くば傳聞として書ける筆致に至つては常に斯くの如く無雜作に他人がましく叙し去つて居る、其まかるものはまた、余は未だ阿蘇を知らざりしなりの一段に應ずるのである。)

稍長じて地理を習ひ、噴火山の理を聞くに及び、恐怖は余を去りしと雖も、阿蘇は依然として余にとりて一の秘密なりき、

(斯くて首尾相應じ、阿蘇の下に住みて遂に阿蘇を知らざる事を記したのである。)

以上は徳富蘆花が「阿蘇山」の事を描いた一節である。其記事と叙事とを交互に用ひて其間自己と阿蘇との親密を失はぬやう、四時の阿蘇、朝夕の阿蘇、荒るゝ阿蘇、恐怖の阿蘇、盡くをつくして居る、其筆致の如きも言はむと欲する處を縦横言ひ去つて筆端少しも窘束せぬ。まかも其口語を挾むに老僕の言を寫生して其口吻曾て老僕の體を失はず、全文の進行を助けて話説に最も味を添へた。そうして其文

の脈と相聯つて各段相呼應するさま、全く一個の散文詩を見るやうである。諸子は次第に如斯筆致を學ばねばならぬ。

### 第十三日 修 辭 (一)

文の構成に必要な事として、言語の善、良なる使用法に背かぬやう注意せねばならぬ。即ち第一、其使用の現在のものなるか否かを確め、第二、其國民一般のものなるか否かを確め、第三に其顯著なるものか否かを確め、第一は既に死語となつて居る古事記、舊事記乃至は古い物語などのうちにある今日通用しない詞がある、即ち死語がある、是等を好んで用ひることは文脈も斷絶し、他にも解せられず何の得る處もない。第二は一地方に限られた詞を文中に挿入する、が如き場合、特に其地方を發揮すべき時の外用ひる事はよろしくない、それから外國語は國語との調和を破らざる限り、若くば外國語でなければならぬ場合の外片假名交りの文は面白くない、偶々作者の淺薄を示すのみである。第三は研究の粗漏から起る事でまた言語の意義を誤り用うるなども其一つである、例へば「に」と「け」を

混ずが如きもの、即ちげには實に、げにはより、である、月に日にけにといへば、日に月にだんくといふ事になる、又漢字の「是」と「之」とを誤り用ひる等随分多い、其外生硬粗野の言語をも辨へず用うるなどもこの例である。

文字に就いての選擇を了へたならば次に言語を連続して一の完全な意義を形造る句節に就いての注意を拂はねばならぬ。

一、凡ての點に於て國語の文法に背かず、則ち文の正確を保つこと

二、讀者をして容易に理解せしむ、即ち分明なる配置と、明晰なる記し方と、そうして平易なる詞を用うる事、

三、讀者の注意を高め、感覺を激昂するやう文に勢力あらしむる事

四、聲調流麗にして讀むものをして樂ましむ事、

五、文の一致に注意して表はし方の散漫ならぬやう注意する事、

六、思想を表はすに適當な言語の數より一の駄文字もないやう注意する事、即ち文を緊約する事、

既に文字と句節に對する注意を了へたならば、次には句節の集つて一つの思想

を、表はす團體となつて居る段落に就いても、左の如き注意を要する、これは特に諸子の熟讀を望まねばならぬ。

一、段落を明晰ならしむ事、即ち冒頭の句節で段落の主旨を提起し、また其觀察點を示さねばならぬ、そうして一段互に論點の推移を明らかにして相照應するやうせねばならぬ、

二、段落にも亦勢力がなくてはならぬ、即ち眼目の思想を著明にして眼目ならざるものは之れを助けるといふ配置をせねばならぬ、そうして重きものより、輕きものに、興深きものより、興淺きものに漸次歩を移す描寫法が必要である、

三、段落の聲調を保たんとすれば、先づ句節と句節の接續を滑らかに句節の長短緩急に變化あらしめるやう注意を要する。

四、段落の一致を保たねばならぬ、一段落は一題目を説く爲めに、一句節は一思想を説く爲めに興へられたのであるから、異分子を挿まぬやう注意せねばならぬ、

既に段落を整へたならば段落の集つて一層大きな團體を作れるもの、冊といはず、巻といはず、これを篇章と總稱する、其篇章に就きても段落若しくは句節同様の注意を拂はねばならぬ。即ち篇章中の前段末と後段頭とは最も關係深き言語を置き、各段の意脈を通ずる事、全章の一致を保つ事等同様の理を以て推知する事が出来やう、即ち文を作るには第一材料の蒐集、第二大體の草案、第三按排布置、第四首尾一貫せるや否やを考察するにある。唯大文章に就いて注意して之れを檢するのが自己進境の第一である。

四四

第十四日 修辭 (三)

漢字の誤は其淺學を證する材料となるものである、左に類似の字體を並べるから注意して間違はぬやうせねばならぬ。

- 刀力 切刃などは刀、効は力
- 助肋 助力補助など助、肋膜筋肉など肋
- 印卍 印却、卍卿など、那、郵部郷など

- 且旦 苟且組沮は且、旦夕但は且
- 文父 紋、斐は文、攻、致、政は父
- 干于 汗、旱、杆は干、迂、紆は于
- 斤斥 斤、折、欣、新は斤、拆、拆、訴などは斥
- 未末 未來、味、妹は未、末子、沫、沫は未
- 爪瓜 爪牙、爪彈は爪、孤、狐は爪
- 兔兎 勉、寬、宥、宥は兔、玉兔は兔
- 佳佳 佳節、佳肴は佳、推、椎、雖は佳
- 鳥鳥 鳥兎、鳴呼は鳥、鳥獸、鳴謝、嶋は鳥
- 李季 桃李、行李は李、季節、季候は季
- 卯卯 仰、抑は卯、柳、留は卯
- 技枝 技術、技倆は技、枝葉、枝幹は枝
- 朽朽 老朽、不朽は朽、朽木、縣は朽
- 幹幹 幹幹、幹事は幹、幹旋は幹、書翰は翰

專專 傳承專門、團は專、博師傳は傳  
 帥師 元帥、太宰帥は帥、師團、師範は師  
 戊戌戌 戊辰の役は戌、十二支の戌、衛戌は戌  
 巳己 スデニはなかばつき、オノレは中みなあく  
 東東 凍棟は東、諫練鍊は東  
 段段 段落、鍛鍊は段、假、暇、霞は段  
 祿祿 俸祿、金祿は祿、記録は録  
 治治 冶金、陶冶は治、治療、政治は治  
 緑緑 緑麥、緑野は緑、因縁、結縁は縁  
 綱綱 紀綱、大綱は綱、網羅は網  
 蹟蹟 事蹟、足蹟は蹟、成績、紡績は績  
 易易 貿易、容易、錫は易、陽、場は易  
 氏氏 神祇紙は氏、大抵、到底は氏  
 侯侯 諸侯、侯爵は侯、氣候、伺候は候

藉籍 狼藉、枕藉は藉、戶籍、書籍は籍  
 其他字典に就き注意すべきである。

第十五日 修 辭 (三)

漢文體の文章を書くには助語を最も注意せねばならぬ。例へば日本の假名で「これ」と書いたものは如何なる場合にも意味が通ずるけれども漢字で「此」斯、是と書く時は一つくりに就いて其意味を異にし、随つてまたこれを誤用した時などは文意の通せない事がある。左に其注意すべきものだけを挙げやう。

夫、それと讀む發語であつて、此事、此物、此理を指す時に用うるのである、夫れ天地は萬物の逆旅。

これが句節の結尾に附く事がある、必らず子の言か、夫、斯様な時には歎辭になる。

又「か」と讀む場合がある、夫の詩を學ぶ者、夫の二三子、意味は物指す詞で「か」といふのと同じである。

蓋、けだしと讀む、おしはかつてみる、推原するといふ意味を以て居る、夫れ天地は萬物の逆旅といふ時は斷定的で、蓋し天地は萬物の逆旅といふと推斷になる、但だ其推斷は天下一般に認める處の推斷でなければならぬ、惟ふ天地は萬物の逆旅とは違ふ、發語としての用ひ方は、夫と相似たものである。

且、かつと讀む、發語として、且天之生物也の類がある、深い意味はない。「ましてや」と訓すべき場合がある、且つ子の言過てり、又にしてと訓すべき場合がある、明且つ哲、そのうへにといふ意である。

紅葉かつ散る池の上といふ如き場合がある、これは且の意ではない、かつ、散るからうじて、散るのである、漢文體の文章には用ひない。

是、これ、之、これ、共に、これと訓するが、是は全體の事を總括した場合、之は其うちの或る一事一點を指す時に用うる、例へば上文に千里の馬の事を論じて來て、

馬の千里なる者、一食に或は粟一石を盡す、馬を食ふ者は其能く千里あるを知つて而して食はざるなり、是の馬や千里の能ありと雖も、食飽かず力

足らざれば、才の美外に見れず、且つ常馬と等しからむと欲するも、安むぞ其能く千里なるを求めむや、之を策つに其道を以てせず、之を食ひて其枝を盡すこと能はず。(韓退之)

文の是の馬やは斯くの如き馬やといふ、上文を總括し來つた詞である、之を策つ、之を食ひは直ちに千里馬其ものを目前に見るが如く指したのである。

斯、これ、此、これ、斯は詩に多く用ひられる、文を飾る時例へば、夫れ斯れ、之を契ると謂ふ、斯れ、文斯れ、武のたぐひで、至極軽い意味に用ひられる、此は彼に對して用ひ、又物事を定むる時例へば、此の謂也といふやうに用ひる、斯は軽く、此は重し。

即、乃、則、皆、すなはちと讀む、即は、とりもなほさずと訓して、直ちに其者をさすのであるが、漢文家は往々、即と同意味の便を用うる例へば、竇灌田蚡の傳を讀みて、其酒を使ひ座を罵るを想ふ、口語歴々として目に在るが如し、便ち、是れ靈山の一會といふやうに、又、乃と、則は例へば、舉世之を非とするも、力行或はざる者の如きに至りては、則ち、百千年乃ち、一人而已といふやうに、則は上句

五〇  
の意を承けて直ちに下句に送る辭で古來れば則といつて居る、何々すればと訓ずる場合が多いのである、乃ちはそのと訓ずるにして而してなといふのと同じ意である。

漢文の助語には起語、接語、轉語、襯語、束語、歇語、嘆語など種々な種類がある、一々これを示す追がないから、こゝには必要なものばかりを擧げたのである。

第十六日 修辭 (四)

漢語では同じ「みる」といふ動作でも「視」「見」「觀」等仔細に區別して居る、それを日本の詞で訓ずるには餘りに冗長な綴字を要するので一様に「みる」とのみ訓じて居る、これが爲めに屢々誤を生じて飛んでもない間違を生ずる事がある、其必要なものだけを擧げやう。

含・銜(ふくむ) 含は口に物をくゝむ事、銜はくわえる事である、杯を含むと書いて笑はれた話がある、何だか杯を煩張つて居るやうに聞える、故に「含嗽」といひ「杖を銜む」といふ。

俯・伏(ふす) 俯はうつむく事、伏はべつたりとふす事、伏して惟ふといへば隠れて考へるやうに聞え、俯兵起るといへば、首を俛れて居た兵が頭でも上げたやうに聞える。

見・視・觀・覽・看(みる) 見は物の目に觸れるのをみる事、視は此方から目をとめて見る事、故に「一見」といふのは「一目みる」ことで、凝視は「ちつ」とみ入ることである、觀は「ながめる」事で、日光をみるのを「觀光」といつて、見光「視光」といはぬ、覽は「と目」にみ通す事で「展覽會」といつて熟語をなす、看は目の上へ手をさゝへて見る事が本來の意義で、氣をつけて見るといふことになる、脚下を看せよといふと、あしもとに氣を注げるといふ事である。

征・伐・討・擊・打・撲・叩(うつ) 征・伐・討は軍の事に用ひる、征は上より下の罪を軍でうちたゞす、伐は單に軍にてうつ、故に「征韓論」などいふのは朝鮮を以て曾て我が屬國と見做した爲め、征露といふのは我が天皇陛下の勅命を以て起つた軍なるが、故に「討は罪を鳴らしてうつ事、それから擊と撲とでは擊が強く打はたゞく事、叩もたゞく事であるが、叩頭といつてすりつける位な、かるうち



するにも用うる、而して、頭を打つといへば、すりつける位では濟まない。

贈送遺餞、おくる贈は物をやる事、送は人をおくる事、故に贈別といはずして送別といふ、餞ははなむけするといふ、言葉でおくつたり、物を別れにおくつたりする事で、みおくるのではない、遺はのこし置く事である。

汲酌、くむ汲は井の水をくむ事、酌は酒をくむ事、故に水を酌むといへば水を酒にして酒の代りにくむ事である。

取執採把、とる取はわがものにする事、執は物を固くとりしむる事、故に執筆といひて、取筆とはいはない、採はひろふと訓して、採花などいふ、つむ心地である、把は握むこと、劍を把るなどいふ。

泣鳴啼、なく泣は聲を出さないで涙を出してなく事、啼は聲をあげてなく事、鳴はすべて聲の發するものをいふ。

述宣舒伸、のふ述はいひのべる事、前よりの事をひき続ける事、宣はひろげる事、あまねく通ずる事である、舒はのびやかにのべる、即ちゆるりとのべる事、伸はせのびする事、ひきのばす事である、故に宣言はふれと訓するのよから

う、屈伸はのびちぢみと訓するのよよい。

望臨、望のぞむ望はまちのぞむ事、屬望といへば人に仰ぎのぞまれる事である、が臨席といふのは尊きものが昇しい處へ行きのぞむので、臨は高い山などから下を見下ろすやうな場合、望は臨と同じと心得ればよい。

是等の例は一々に盡されぬから文を讀む時注意して貰ひたい。

第十七日 修辭 (五)

言文一致體の文章が一般に用ひらるゝと共に國語の文法は非常な亂脈になつて意味の全く通せざるもの、意味の其の表示せんとする意思と全く相反せるものなど、随分多い、この誤の甚しいものをたゞさう。

一、助辭のあやまり、  
だに、さへ、すら、

せめて香だに、あらばと思へり、香なりともせめてあるならばと思つた、香さへこめたり、その上に香までこめて居る。

にほひす、らあらず(句ひだけもなし)

二、な、その格

泣いそ、勿泣いそ、泣いそは、なを略したのである  
人にないひど、ぞと濁るのは間違つて居る)

三、との事

日本と露西亞の戦争(日本と露西亞との戦争とあるべき筈である、とは必らず二つを要する)

四、もの事

頼みもし、又頼まれつるに(頼みもし、又頼まれもし、つるにとあるべき筈である、二つを重ねる時には二つのものが必要である)

五、をの事

我こたびの戦に加はらんもの、もの、を、とあるべき筈である)

六、し、とせしとの事

幾とせ共に暮らせし(暮らしい、とあるべき筈である、流申、暮盡は四段活用

の動詞で、さし、す、せに働く、せしと書くのは違つて居る)

彼は斯くて世に處し、人なり(處せしとするのが正しい、漢語はすべてせし

と受くるものと心得ねばならぬ)

七、さんとせんととの事

彼を愛さん人はわれのみ(愛せんである、漢語はすべてせんと受くるのである)

八、活語のあやまり

そを確めるいとまなし(確むるである、めるは口語)

怨みるに堪ゆべけんや(怨むるに堪ふべけんやとあるべきである)

九、時間をあらはす動詞の事

申せば如何に(申さばいかにが正しい)

試に堪へ得るとするも(得べしとあるのが正しい)

彼に眞面目なる事は望むべからず(眞面目ならんである)

斯くせば世を益する事少からず(益せんこと少からざるべしとあるべきである)

ある

第一伊豫丸來る十日出航せり(出航せん又はすべしである)  
我死せば山に埋葬せよ(死すればである)

其始め國民多く軍備擴張を悦ばざりき、彼等は恐らく其必要なしとせ、るな  
らむ(せしならむとあるべきである)

十、其他

全く敵を驅逐したるは八時廿分なりしといふ(八時二十分なりきとなけれ  
ばならぬ)

彼こそ強の者なるべし(なるべけれと結ばねばならぬ、係りがこそであるか  
ら)

彼ぞ強の者なりけり(なりけると結ぶ、係りはぞであるから、ぞは廣きもの、  
中で一つをさす者、こそは多々あるもの、中で一を親しくいふのである)  
間者は我軍の手にて縛したり(自他を誤つて居る、縛せられたりでなければ  
ならぬ)

諸子はこれらを不用意にしないやう氣を注げねばならぬ、諸子の國文上の力に  
これを以て知る事が出来るのである。

第十八日 修辭(六)

文の勢力と優麗とを増す爲めに或は譬喩法、或は倒句法、或は其他特別な辭法を  
以てする事がある。これら言語の特殊な措辭をする事を轉義、又は辭法といふの  
である、左に其大要を示さう。

轉義の分類、轉義は或は一つの事を説明する爲めに、他の之に類似したものを  
以て比較するとか、或は生命なき金石草木に生命を與へてこれを人間と同じやう  
にあつかふとか、其文辭の明瞭と勢力とを加へるまかたの異なるに隨つて直喩、隱喩、  
混喩、擬人の別がある。

一、直喩

十畝の外桃花林を爲し、紛として紅霞の如し、  
東波山を見れば翠巒拭ふが如し、

渺々たる海水は瑠璃を敷けりともいひつべし  
百千鳥の囀づるも笛の音に劣らぬ心地す  
木々の蔭よき程に染め做して綿を織りかけたる如し

斯様に一つのものとの他に之に類似したものとを比較して其一つから直ちに他のものが聯想せられ其二つの間に幻想美の似通ふ事が出来るものをいふのである。

二、隱喩

君子の徳は風なり、小人の徳は草なり、草互に風を加ふれば必らず偃す、  
荷葉青錢を疊む、

楊貴妃皇帝の御使に逢ひて泣きける顔に似せて、梨花一枝春の雨を帯びたりなどいひたる、

露は道芝に玉を磨き菊は藪蔭に黄金を欺く、

山吹は岸よりこぼれて黄金を散らす、

梅枝月を帯び寶釧玉釵錯落として地に滿つ

斯様に類似の二物を胸中に浮べかれとこれとを比較するのは直喩と同じである。

るが唯これは直喩の如くあからさまに記るさず含蓄あるやうに記すのである故に直喩は如し似たりなどを勢ひ多く用ひ隱喩はこれを用ひないのである。

三、混喩

霧不斷の香をたき月常住のともしびをかき、

鶏人曉を唱ふ聲明王の眠を驚かすほどにもあらず、

屍を山野に曝さばさらせ浮名を西海の波に流さば流せ或は磯邊の浪枕八

重の汝路に目をくらし

腹黒きをのこかな

混喩は譬喩の事物と本文の事物とを兩つながら現はさずして二物を混同して一物となして記すのである故に冷熱熱心深き思ひ重き任務など冷熱深重といふやうな物質を形容したものを移して心の上の形容とすることまた混喩である。

四、擬人法

春の雨いと静かに降り海棠の眠氣なるに引きかへて桃の梢は目覺しく紐解きたり、

振り仰がる、不二の嶺よ、おん身が熱き幻像の雲の飛ぶ事迅くして云々、  
上野は黙して言はず、淺草は語りて休まず、  
時に還る夕鳥、嘗て曲亭馬琴に告げて曰く、おれは用達に行くのだ、  
小猿が能う物噓舌る、

擬人は斯様に心なき草木蟲魚より土地の如きまでこれを人に見たて、生命あり  
精神あるものとして取扱ふのである、轉義のうちにつきて、擬人は最も詩人の悦ぶ  
所でまた最も巧みなものである、混喩、隱喩はこれに續いて、直喩は最も幼稚である、  
文の優麗と勢力とを求むるものはこれらをうまく用ひるのである。

第十九日 修 辭 (七)

以上を以て轉義の概要を盡した、以下辭様の大體を説かう、轉義は言語の意義の  
轉化である、辭様は其順序の變化である、辭様にも亦種々の種類がある。

一、重言

瓢兮、瓢兮、我れ汝を愛す、

君君たらすむは臣、臣たらす

あし引の山の、車に妹まつとわれ立ちぬれぬ山の、車に

感情の深大な時は單に普通の言ひあらはし方で満足が出来ず、虞や、虞や、汝を、奈  
何せむとは蓋し人間の至情であらう、斯様に重言する時、また文をして聲調を整へ  
しめる爲めにする時、この二つの場合がある、

二、駢體

花は紅、柳は綠

晝は苗を耘り、夜は麻を績ぐ

祇園精舎の鐘の聲は、諸行無常の響あれども、飽くまで色を好むものは、きぬ  
ぐの別れを惜むが故に、只これをしも、譬とし、憎めり、沙羅双樹の花の色は、  
盛者必衰の理りを顯はせども、徒らに香を愛づるものは、風雨の過ぎなむこ  
とを妬むが故に、偏に延年の春を契れり

駢體は文を飾る爲めに句を對して相用ふるのが常である、

三、頓旋

ピエル、バナンは奔放の狂人にあらず、(中略)折ふしはまた、手兵似の畫筆抛ちて、身を床に委ね、偏にある面影の前に拜跪して、胸裂けたらん如くすゝり泣きす、さて、聲も途切れて呼ぶなりけり、ロセツトよ、覺めずや、ヅキナスは逝きぬ、我が業は既に了れり、覺めずや、ロセツトと。

これは感情の激昂につれて文の語調を變化し、突然二人稱などを用いて、現在の如く話説するものをいふのである。

四、直現

ものゝふの矢なみ繕らふ籠手の上に震たばしる、那須の篠原、斯様に現在動詞を使うて現に其場に讀者があるやうに記すものをいふのである。

五、倒装

行け、好漢、滿洲の野に

橘の袖の香ばかりむかしにて、移りにけり、な、古き都は、

文勢を増し、聲調を滑かならしむる爲めに句を顛倒して用ふるのである。

六、豫言

腰に差したる小刀を抜くより早く、切り付けたり、抜くよりも早くとは、甚だをかしいようであるが、突嗟急遽の場合を表はすには最も適切な言葉である。

七、疑問

かばかりの事、わきまへぬ汝にては、あらざりしが、人それこれを何とかいはず、

心に眞實疑うて居るのではない、全くは心に思ひ定むる所があるのだが、語勢上疑問とするのである。

八、對照

花は根に鳥は古巢に歸るなり、綠色と灰色との配合は一番不快な色をつくる、鶏口となるも、牛後となるなかれ、

九、漸層

六四  
蟲は松蟲す、蟲はたをりきりぐす、蓑蟲いとあはれなり、(中略)風の音きい  
知りて八月ばかりになればちいよくとはかなげになく、いみじくあはれ  
なり(枕の草紙、蟲はといへる條參看すべし)

大なる刺激を與へる爲めに文を疊みかけて漸次に其力を増す法である、これら  
の辭様はまた書を読むとき注意して見るがよい、

第二十日

和漢譯文 (一)

漢文を日本文に譯して其原文の興趣を失はぬやうにする事の困難な如く、日本  
文を漢文に譯することも亦難い、漢文は飽くまで棒讀みに讀み下す處に味があるの  
を、我が國の文法に準據して我が國の文に記しなほした時、既に文勢を損じて、も  
の味はない、なほ英語の譯文が一つとして原文ほどの面白味がないのと一般であ  
る。

故に譯文は其意味を知るといふに止る位が今日の場合では關の山である。け  
れどもまたこの譯文が出来ないでは事を缺く譯であるから其大要を示さう。譯

文に二つの法がある、一つは直譯で、一つは意譯である、直譯といふのは白文點に訓  
を附けるのと選ばないので、旅館寒燈獨不眠とあるのは、旅館寒燈獨り眠らずと譯  
す、意譯といふのは、旅籠はたごに泊つた夜は凄然しんげんとかぼそひ灯の影に唯一人夢も結ばれ  
ないといふやうに譯するのである。

一、直譯法

義經之向鴨越也、路險夜黑、令辨慶索嚮導、辨慶認火光、得一人家、

義經の鴨越に向ふや、路險にして夜黒し、辨慶をして嚮導を索めしむ、辨慶火

光を認め、一人家を得たり

見翁嫗對坐、告以故、翁曰、小人以獵爲業、諳知山路、而今老矣、有一兒、膽氣可用、呼起

從辨慶謁義經

翁嫗の對坐するを見、告ぐるに故を以てす、翁曰く、小人獵を以て業と爲し、山  
路を暗知す、而れども今老たり、一兒あり、膽氣用ふべしと、呼び起す、辨慶に從  
て、義經に謁す、

義經執火視之、長身高顯、持獵弓矢、問其齒曰、十七、義經爲冠之命、姓名曰、鷲尾經春、

給鎧杖以爲鄉導

義經火を執つて之れを視る、長身高額、獵弓矢を持つ、其齒を問へば、曰く十七、義經爲めに之れに冠し、姓名を命じて、鷲尾經春と曰ふ、鎧杖を給して以て郷導と爲す、

問鴨越如何、經春曰、太險、人馬不可行、唯鹿能踰之、義經曰、鹿四足、馬四足、等耳、先衆馳之、至鴨越則天明、

問ふ鴨越如何、經春曰、太だ險なり、人馬行く可からず、唯鹿能く之れを踰ふ、義經曰、鹿四足、馬四足、等しきのみ、衆に先て之れに馳す、鴨越に至れば則ち、天明なり。

漢文を譯すには是非其文法を心得ねばならぬ、處が漢文法に未だ完全したものが無い、諸子が漢文法を學ばむとならば宜しく漢書を多讀する事である、世に馬氏文通といつて漢文法の書があるがそれは参考にならうとも諸子が唯一の寶典とするには足りない、須らく多讀すべしである、多讀は自分に文法を教へる。漢土の小兒は先づ其文義を解するに句讀法を授かるそうであるが、白文に句讀を附ける

事が出来れば、既に漢文は讀めるものである。

曾子曰慎終追遠民德歸厚矣、

これに句讀を附して、曾子曰、慎終追遠、民德歸厚矣。斯様にするのは、句節と一段落とを別つのでなく、句節中の一團をなせる小思想を句切るのである。即ち、曾子曰、終りを慎み、遠きを追へば、民德厚きに歸すと讀む、又これに反點を附して、曾子曰、慎終追遠、民德歸厚矣とするのは既に訓譯したものである、更らに之れに助聲を附して、曾子曰、慎終追遠、民德歸厚矣とすれば、日本文に書き下す必要はないものなつた。

漢文を譯す上に注意すべきは前出の用字法を心得る事と、同じ字で屢々場所に依つて意義を異にして居る事を注意すること、それから英文法が甚だ漢文を譯す上に助けになるからこれを研究する事と、及び直譯體を最も練習する事とである。

第二十一日 和漢譯文 (三)

二意譯法



上皇をはじめ参らせて、あらゆる人々、おとに聞ゆる爲朝見んとて、こぞり給ふ、右府則ち合戦のをもむき、はからひ申せと宣ひければ、畏て爲朝久しく鎮西に居住仕て、九國の者共したがへ候に付て、大小のかつせん數を知らず、中にも折角の合戦廿餘度なり、或は敵に圍れて強陣を破り、或は城をせめて敵を亡すにも利を得ること夜うちにくこと侍らず、まかれば只今高松殿にをしよせて、三方に火をかけ、一方にてさへ候はんに、火をのがれん者は矢を免るべからず、矢を恐れんものは火をのがるべからず、主上の御方心にくも候はず、但し兄にて候義朝などこそかけ出んずらめ、これもまんなかさして、いとほし候なん、まして清盛などがへろく、矢何程の事か候べき、よろひの袖にて拂ひけちらして捨てなん、行幸他所へならば、御ゆるされをかうふりて、御供のもの少しいんずるほどならば、がよても御てしをすて、にげさり候はんずらん、其時爲朝参りむかひ行幸此所になし奉り、君を御位につけ参らせんこと、たなごゝろをかへすごとくに候べし、主上をむかへ参らせん事、爲朝二矢はなたんずるばかりにて、いまだ天のあけざらんさきに、せうぶをけつせんこと、何の疑か候

べき、

この保元物語の一節を大日本史通語日本外史等いろくくに譯して居る、今日日本外史のを摘録しやう

爲朝進而言曰、臣大戰二十、小戰二百、以芟鋤九國、以小擊要、每利夜攻、臣請今夜襲高松殿、火其三方、而要之一面、其善戰、獨有臣兄義朝、然臣一矢斃之、至如平清盛輩、臣鎧袖一觸、皆自倒耳、乘輿必不得不出、臣乃加矢其從兵、徒與於此、而奉陛下於彼、易如反掌、則東方未白、而大事決矣、

意譯は斯様に、小戰二百の如き語を加へ、清盛がへろくく、矢の如き詞を略して居る。これは一つは文の調子と語勢上から斯くして其力を助け、他は日本固有の詞で漢譯するに適當な詞がないから直に、至如平清盛輩としたのである、要するに意譯は其意を失はないやうに能く原文を咀嚼して而して更に原文に拘泥しないやう別個の一文を作ると心得て、新しい辭句を組織するがよい、但しそれには相當の漢字の素養が必要であるから勉めて書を讀まねばならぬ、

爲朝對曰、臣久在鎮西、陷城破圍、屢歷戰陣、其制勝也、無若夜襲高松殿、

三面縱火、一方攻之、兵火相逼、敵必不能支、敵臣者唯臣兄義朝耳、臣能一矢殪之、況  
庭弱如清盛輩乎、主上若徙他所、臣請得射駒從少許、則彼必棄乘輿而走、臣乃遷乘  
與於此、使陛下得再卽天位、易如反掌、決勝之機、不待天明、

これは同じ保元物語を譯した大日本史の文である。大日本史は實を主としたが  
爲めに文を疎にして原文の妙を捨てた處が多い、中にも折角の合戦二十餘度云々、  
の處を抽象の文字を集めて、屢屢戰陣とのみした爲に文勢が餘程減じて居る、日本  
外史の至如平清盛輩、臣鎧袖一觸皆自倒耳の如き痛絶なる語を用ゐて爲朝の面目  
を髣髴たらしむる處があるに反して、大日本史は庭弱如清盛輩乎とのみ書き去つ  
て居る。

漢文と日本文とは自ら其妙處を異にして居る、故に漢文の妙處は妙處として飽  
くまで之れを發揮し、日本文の妙處はまた日本文の妙處として存せしめ其間を巧  
みに鎔治して互に相適したものを選ぶ處に意譯の妙はあるのである、尙ほ意譯は  
原文の意を失はぬやうくれぐれも注意すべきは云ふ迄もない。

第二十二日

弔祭文 (一)

祭文はむづかしいもので元來をいふと盡く踏韻のものでなければならぬ、茲か  
し日本の文章に韻といふものはない、随つて日本文の祭文を踏韻にする必要はな  
いのである、けれども幾分修辭法を以て、或は重言、或は駢體、或は頓旋、或は倒裝、又は  
譬喩法を用ひ、擬人法を用うる等の必要がある。なせかといふのに死者を生ける  
が如く祭るので酒やいろくの御馳走を靈前に供へ、尙くば來り饗けよといふ意  
が飽くまでも表情から迸るものである。であるから其激越せる感情を表はすに  
は修辭も亦格段の工夫を要するは云ふ迄もあるまい。但しかの劉勰が言つて居  
るやうに「祭奠の文は宜しく恭うして且つ哀かるべし、若し文章華美にして實なく  
情鬱して宜びざれば皆此れに巧なるものにあらずであるから其意を失つては駄  
目である、今左に孔明が周瑜を祭つた文を擧げやう。

維れ大漢建安十五年、南陽の諸葛亮愼で清酌庶羞の典を以て祭を大都督公瑾  
周府君の靈前に致す、嗚呼公瑾不幸にして夭亡す、修短素と天人の傷まざるに

非ず、我が君寔に愛んで酒一觴を酌す、君其れ靈あらば我が蒸骨を享けよ、弔ふ君幼にして學び以て伯府に交り義に仗つて財を疎んじ舍を讓りて以て居る、弔ふ君弱冠にして風雲に際會し霸業を定立して江南に割據す、弔ふ君壯にして力遠く巴丘を鎮め景什慮を懷きて虜を討じて憂ひなし、弔ふ君が丰度佳く小喬に配し漢朝の婿當朝に愧ぢず、弔ふ君が氣慨ある主質を納れず、始め翅を垂れしも遂に能く翼を奮ふ、弔ふ君が鄱陽將幹來り説き、府君舌を納れ主に事へて遂に濟す、弔ふ君が弘才文武籌略途々、小子心寒く膽落つ、照君凜々公獨り、鬪々火攻敵を破り強を挽きて弱を爲す、想ふ君が當年の雄資英發を、君が早逝を哭して地に俯して、血を流す忠義の心英靈の氣命、三記を終へて名百世に垂る君を哀んで情切なり、愁傷千結惟れ我が肝膽悲んで絶ることなし、旻天昏蕩三軍愴然、主已に哀泣して更に皆淚漣たり、亮孔明や不才計を問ひ、謀を求め英を助けて曹を拒み、漢を輔けて劉を安んじ、犄角の援首尾相儔す、彼の存亡の若き何をか慮り、何をか憂へん、嗚呼公瑾、生死永く別る、朴にして其貞を守る、冥々滅々魂如し靈あらば以て我が心を繼みよ、此より天下復た響なし、嗚呼痛い哉

伏して惟だ尙くば饜けよ。

周瑜と孔明とは敵味方でお互に睦くない、處が周瑜が吳の參謀長として大に威權を振うて居たものが俄かに死んだので、孔明は之れを玄德に告げこの機會を利用して君の助けとなるものを吳の國から連れて來やうといふので、參謀長の後任となるべき魯肅に今孔明を使として周瑜の喪を弔はずといひやつた、すると周瑜の部下は之を聞いて日頃の怨を孔明に晴らさうと言ひ合して居た、けれども孔明趙雲以下五百の兵を率ゐて行き自ら酒を供へ地に跪いて靈を祭つたのを見て敢て發する者がなく、孔明この祭文を讀んで地に伏し、慟哭した、それを見た吳の孫士は周瑜と孔明と互に睦じかつたものと考へ魯肅も孔明の心中を哀んで周瑜がひとりやきもぎとして居た氣宇の窄いのを不憫に思ふと共に孔明に敬意を拂ふやうになつた。これはひとり孔明の表情術に眩惑せられたばかりでなく、この祭文の聲調と修辭が巧な點にあるのである。弔ふ君が云々の語を重ね來り疊み來つて、七度弔ふを繰り返へした後、始めて「想ふ君が云々と起し、君を哀んで情切なり、愁傷千結惟れ我が肝膽悲んで絶ゆることなし」といひ更らに最後に至つて、此より天下

復た知音なしと結んだ諸子この文を百讀して祭文の眞意に通達するやうつとめられよ。

第二十三日

弔祭文 (三)

こゝには弔文の例を擧げやう、弔は終りを問ふなり傷むなり、慙むなり、生を弔ふを唁といひ、死を弔ふを弔と云ふと書て居る、祭文は敬を主とし、弔文は慰むるのを主とする、故に韓愈の十二郎を祭る文などには其文中、今吾建中をして汝を祭り汝の孤と汝の乳母とを弔せしめむと記して居る、こゝに所謂弔せしむといふのは、嗚呼に所謂唁する事である、これを一同にいふと弔は悔みをいふ事である、御愁傷の至りで、と陳ぶるのと同じである、且つ弔文は目下或は同輩に對する場合で、目上其他尊重すべき人には、弔文と書く事は不穩當である、それから、古戰場を弔ふといふやうなのは其無縁佛を弔ふので、場所を弔ふ譯ではない、かの謝惠運が「古冢を祭る」といふのと同じの意味である、左に弔文の祖なる、賈誼の「屈原を弔ふ」文を擧げやう、恭しく嘉惠を承けて罪を長沙に竣つ、灰かに聞く、屈原自ら汨羅に湛めりと湘

流に造托して、敬で先生を弔ふ、世の極り罔きに遭ふて、迺ち厥の身を隕す、鳥喙哀い哉、時の不祥に逢ひ、鸞鳳伏し、竄れて、鳴鳥翔翔す、關雉尊顯せられて、讒諛志を得、賢聖逆に曳かれて、方正倒まに植てり、隨夷を溷れりと謂つて、跼蹐を廉なりと謂ひ、莫耶を鈍しと爲して、鉛刀を銛と爲す、吁嗟黙々たる生の無故なること、周鼎を斲し、棄て、康瓠を寶とし、罷牛に騰駕して、塞驢に駮す、驥は兩耳を垂れて、鹽車に服し、章甫は履に薦けり、漸く久しかるべからず、嗟、苦し、先生獨り此の咎に遭へり、諄に曰く、已ぬるかな、國其れ吾を知るとなし、子獨り壹鬱して、其れ誰と語らむ、鳳縹々として、其れ高く逝く、夫れ固に自ら引て、遠く去れり、九淵を襲ねたる神龍は、沕として、淵く潜れて、以て自ら珍とし、螭獺に備いて、以て隱處すれば、夫れ豈に蝦と蛭蟻とに従はんや、貴ぶ所は、聖の神德、濁世に遠がつて、而して自ら臧る、麒麟をして、係ぎて、羈すべくば、豈に夫の犬羊と異りと云はんや、般つて、紛々として、其れ此郵に離へり、亦夫子の故なり、九洲を歴て、其君を相けん、とすれば、何ぞ必らずしも、此都を懷はん、鳳凰千仞に翔けるも、德輝を覽ては、之に下り、細德の險微を見ては、遙かに増驟して、之を去れり、彼の尋常の汗漬、豈

に吞舟の魚を容れんや、江湖に横はるの鯨固より將さに蠅蟻に制せられんとす。

こんなものになると讀み去つて何の事やら解せられなくなるであらう。よろしい解せられないでもよろしいから幾度も讀み給へ、讀書百遍意自ら通ず、讀んで行くうちには自然解せられる、若し解せられなかつたならば、古文具實の註釋書などを見るがよろしい。今餘裕がないのでこれを一々に解することはできぬ。尙これは少しく普通の文體と違つて狂體な處がある、屈原の始めた離騷といふ文體に似通つて居る故に、この文を評して古人も、離騷に髣髴たれども而かも切要惻愴なるは稍々同じからざるものに似たり、否らざれば則ち華過ぎ韻緩うして化して賦と爲れば其れ能く奪倫の譏を免れんやといつて居る。徒らに狂體に陥ちて離騷にのみ真似たといつては餘り屈原を辱めたやうに成る。弔文は飽くまで真情から出たものでなければならぬのであるから古人はこれを誠めて居る。そこで屈原を弔ふといふやうなのは敢て清酌庶羞の奠を供へるといふのでなく、劉勰が所謂其の驕貴にして身を殞し、或は狷介にして道に乖き、或は志あれど而かも時に遇

せられず、或は美才あれど而も累ひを兼ねし者、後人追うて之を慰め並に名けて弔と爲すといふ其例である、諸子はなほ軍國文範などに就いてよく諸種の弔祭文例を味はうがよい。

第二十四日 練習(一)

今日より以後一週日を限つて諸子が練習の日とする。諸子は今日までに學び來つた事を縦横に應用して種々な力を用ひて見ねばならぬ。

中井履軒の「題楠公訓子圖」といふ文がある、今これを解剖しやう

子に訓へて其忠を勗めしむるは父の慈なり(第一節)

この節中に點綴せられた文字は子、訓、忠、父、慈といふ圖中の主眼目である、これを第一扇とする。

父に繼ぎて其君に忠あるは子の孝なり(第二節)

此節に新に出た文字は繼と孝とである、又圖中から連想せられる主眼目である、これを第二扇とする。

一の「忠」にして而して、孝慈併はず、大なるかな忠や(第三節)

此節に於て第一、第二扇は併せ鎖された忠、孝の二つを一つの忠に歸して、大なるかな忠や」と結び、楠公訓子の圖に對する直接の抽象的所感を披瀝し終つたのである、これを第一段とする、

其家に和らぎ、族に睦じく、士を撫で、民を恤れむに及ぶまで、忠に非るはなきなり、亦孝にあらざるはなきなり(第一節)

前段の忠孝を反覆して下の文を自然と出るやうにしたのである、そうしてこの一段は盡く駢體法を用ひて居る、即ち「家に和らぎ、族に睦じく、士を撫で、民を恤れむ、忠に非るなきなり、亦孝にあらざるなきなり、そうして其第三の駢體中に、亦の一字を加へたのは以上の二駢體が共に同一筆法であつたからこれに變化を求めたのである、又其句に長短のあるのも變化をもとめた故である、これを第二段とする、

然らば千歳の下、涙を斯圖に墮さるものなけん(第二節)  
始めて圖を出したのである、これが無つたならば決して圖に題すとはいへな

い、一つの感愴文に止るのである、

蓋公の子を訓ふるは特に其子を訓ふるのみに非らざるなり、亦萬世の人の臣たるものを訓ふる所以なり(第三節)

前節の「千歳の下」は此節の「萬世の人」に相對照し、この節の結末はこの文の冒頭と相映じて居る、又この節の二句は修辭の對照である、

諸子は斯様な作例に則つて、左の宿題を作れ

「廣瀬中佐其部下を閉塞船中にもとむる圖に題す」

「日露大戦史」を繕いて参考とするがよす。

第二十五日 練習 (三)

藤井高尙の文は何の爲にかくものぞ、といふ一文を擧げてこれを解剖しやう。

文はなにの爲めにかくものぞ、人にむかひいふことばはこまやかなるも、いひつぐたびに、たがひあやまりもし、年經ては、うせゆくを、文の詞は百千の人にうつりても、いさゝかも、たがふふしなく、事をさへ、心をさへ、萬世にも、つたふべけ

れば、そのために、かくものになん(第一節)

文は何の爲めに書くべきかを論じたので既に題意はこの一節を以て盡きて居る。

さればいふことのすぢく、さだかに、わかれて、人のよくこゝろうべきやうにかきえんど、まことの文のさまにはあるべき、いかばかり詞めでたくとも、いふ事のすぢみだれて、見ん人の、こゝろえがてにせんは、文のこゝろにあらず、ひがことなるべし、これなん文まなびの大むねなりける(第二節)

次には如何にして文を作るかといふ事を記したのである、こゝに文法上注意すべきは係り結びで、かきえんどといふに對しては、あるべきと結び、これなんといふに對しては、なりけると結んで居る、それから、こゝろえがては、心得難たくである近頃、雨過ぎがたの、がたなどいふのと同じやうに誤用して居る、がたは、こゝろである、以上第一段。

かくこゝろえて、いふことのすぢとほるやうにかきえてのちは、いにしへの文の詞のめでたく、をかきさまをまなびて、さるふりにと、かきならふべし、文の

さまをかしからでは、人のめとむる事なく、いたくつたなからむには、かたはしを見て、かいらいたくて、うちおくべければ、かきても、なにのかひかは、あるべき(第一節)

辭足らざれば以て文となすに足らずといひ、言の文ならざるものは之を遠きに傳ふべからずといつて居る、この事を和文に記したのである、文章は第一段第二節にいふ達意の外に詞藻の必要な事をいつたのである。

さればあけくれにまなびならひ、よくかゝまほしきことになん(第二節)  
これで第二段、全篇章を終つた、即ち前文をこの一句で結論したのである、終りの、なんは第一段第一節終りの、なんと共に、あ、り、け、る、といふ結び詞を略して居る。

宿題 書は何の爲めに習ふものぞ

第二十六日

練 習 (三)

菅茶山の筆のすさまに文字の死活と題して文辭に趣きの必要な事を記して

居る左に録しやう。

書札の文字にも死活あり、たとへば一筆啓上仕候より御無事御堅固云々、私宅無恙、時候御自愛、猶期後音云々は、何事もなきにも、書くもかゝざるもしれぬ程の事なり、其の間に、此の間の寒氣は、弊郷は海濱に氷を見、或は半月一月の早なるに、よそには夕立すれども、こゝにはふらずなどいふは、おなじ寒暄を叙ぶるにも、其の地の氣色も、おもひやられて、書狀の文字も活するなり、月日の末に、此の春認めたる時は、雨しきりにふり、時鳥二聲三聲おとづれぬなどかきたるは、いよゝゝ其時其の人のすがたもおもはるゝ様にて、おもしろし、長さ三尋あまりある書札にても、死したるあり、三行四行の書にても、活きたるあり、これらは書札にかぎらず、詩歌連俳にては、心つくべきことなるべし。

この意に叶ひたる例は。

今日の雪には必ず御出と存居候、明朝大分好下物も有之候、祝齋子より一小陶の古酒もらひ、是にて一酌と存候也、其便に走筆如此、臘望、梅上の雪消而山々始霞矣、

これは頼山陽が僧雲華に與へた手紙の文である、又姉崎嘲風が故高山樗牛に與へた手簡の初めに

恐らくは是の書母國に達する頃君は既に印度洋上に浮べるならむ。とこれ等は其雄大なるもの、同じ意味の例である。

諸子はこの意を體して一つの書簡文を工夫する事を要する、それは自己が目下の境遇を其親友に報知する文として、身の田園中にあるものと紅塵萬丈のうちにあるものを選ばず、其日々なしつゝある事、今日の感情、親友に對する情、其他何にてもいひやる事は諸子の考へに任せる。但、文は面白く書くといふのが目的である。そして其文の終りに何月何日と記すべき所へは、其手紙の内容に應じて、ナポレオンの莫斯科に攻め入つた日であるとか、母の三週忌日であるとか、友と櫻の下に人世を論じた何年振りであるとかいふ按排に、それも可成嶄新な意匠で記してほしい。勿論先づ一筆啓上の冒頭から工夫して面白く記さねばならぬ。

宿題 自己が目下の境遇を親友に報ずる文



第二十七日 練習(四)

用語に巧拙がある、誠齋詩話に東坡が茶を煎る時の詩を出して説明して居る、東坡は宋の文章家で殊に字を用うる事に長じた人であつた、詩話は斯うである。

活水還將活火烹、自臨鈞石汲深清、

第二句は七字にして五意を具ふ、水清一なり、深處清二なり、石下之水、非有泥土三なり、石乃鈞石、非尋常之石、四なり、東坡自汲、非遣卒奴五なり、

(活)水を烹るに活火を以てするといふので既に其水が美しく清く、其火が活々と燃えて居るさまが見える、これだけで其清洒新澄な光景眼に見るやうである、第二句は東坡が自適のさまを描き出したので、鈞石に臨むといふだけにもう鈞の居る處河鹿の啼く處といふやうな感がする、詩話に石乃鈞石、非尋常之石といつたのはそれである、これと同時に其あたりの水は石下の水、泥土あるに非らずといつたのもそれである、即ち僅かな詞をうまく活用した爲めに意味深長なものとなつた)

大瓢貯月歸春壘 小杓分江入夜瓶

その水の清美を稱する事極まれり、分江の二字、此れ尤も下し難し

(これも東坡の句の續きである、月を貯へるといふので、其水の美しい澄み切つて居るさまが見える、春壘といふのは、春の人、といふやうに日本でも使つて、其時候と壘とが調和するやう、其二つの間に幻想が起るやうな場合に用ひるのである、杓を壘の中に入れて、水を汲む形容を江を分つといつて、大きい心地にいひなした處に春、洋々の感がある、夜瓶といふので靜かな狀があらはれる、この二句は對句である)

雪乳已翻煎處脚 松風仍作瀉時聲

これ例語なり、尤も詩家の妙法となす、即ち少陵の

紅稻啄餘鸚鵡粒 碧梧棲老鳳凰枝

なり、

枯腸未易禁三椀 臥聽山城長短更

又廬同の公案を翻却す、同は七椀に喫到し、坡は三椀に禁えず、山城の更漏定ま

りなし、長短の二字、無窮の味あり云々

(以上は詩話の評語である、雪乳は湯の沸くさま、松風は湯のたぎる音である、以下少陵の句から翻却し得たのである)

諸子は字々に注意して文を得ねばならぬ。

第二十八日 練習 (六)

叙事文の語と論文の語とは自ら異つて居る、即ち同一の事でこれを叙事文にいふ時と論文にもするときとはおのづから用語を異にして居る、これは論文と叙事文と其性質の相同じからぬ處から別れるやうになつたのである、長谷川東洲は叙事議論の間、各穩當の字面あり、同一事なり、事には則ち云く、季氏將伐顯與、叙言には即ち云ふ、季氏將有事於顯與と、是れ文章の通法なり、頼山陽の文、此等の處に於て尤も心を用ゆ、敢て輕々しく一字を下さず、頼翁嘗て馬遷の、伯夷傳に附驥尾の一套語を用ゆるの疵類を免れざるを論せしを見て、其用意知るべし。

といつて居る、要するに論文の語は飽くまで激越なるを尊び、叙事文は飽くまで意の通ずるのを貴ぶのであるから、其間同じ事を記しても注意せねばならぬ、例へば、暴露滿洲を併呑して更に東洋を席捲せんとするの陰謀を藏すといへば論文の語である

露國滿洲を併せて更に東洋を席捲せんとするの意あり

といへば叙事文の語である、諸子はこの用意を以て、叙事文と論文の作りわけをし、てほし。

宿題 日本海々戰

即ち日本海の海戰を一篇は叙事文とし、一篇は論文とするのである。叙事文は波羅的艦隊が東航した事から筆を起して日本海に日露兩艦隊が衝突した始末を記せばよい。論文は或は東郷司令長官の報告書を土臺として既に日本海軍の意氣が敵を殲滅するにあつた事から筆を起すのもよい。又或は元寇の事に比較するの、もよい、又或は日本國體論を持ち出して其勝利の原因を我が國固有の美風に歸するの、もよい。或は海軍通に聞いて作戰計畫を論ずるの、もよい。又或はこれ

を地理的に論じて或は海流或は潮流其他霧の事、日光の映射の事などに論及するのよき、専ら日本海を戦を土臺に之れに就いての感を論ずればそれで足るのである。二文自ら用語の激越なるものと、穩當なるものとを分つ事が必要である。其参考とすべきものは、當時の新聞雜誌又は日露大戦史などに就いて見るがよい。新聞のきりぬきのやうなものを送られては困る。注意の爲に一言して置く。

第二十九日 練習(六)

山本北山といふ人が、徒然草にある、宗尊親王御鞞の事を數種に漢譯してこれと對照させて居る、即ち文章の變化を示したものである、今左に其對譯を示さう。

(原文)鎌倉中書王にて御鞞ありけるに、雨ふりて後、いまだ庭のかはかざりければ、いかゞせんと、沙汰ありけるに、時に佐々木隱岐入道のこざりの屑を車につみて、多く奉りたれば、一庭にしかれて、泥土のわづらひなかりけり、とり溜めけん用意あり難しと、人感じあへりけり、此事を或人の語り出たりしに、吉田中納言のかはき砂子の用意やなかりけると、たまひしかば恥かしがりき、

(譯文)鎌倉中書王、穉戯、雨後、場未乾、衆僉曰、若之何、佐々木隱岐、太郎車載、鋸木屑進之、以敷之、場上得無泥濘之患、若微平日籍而掌之、鳥剗此、急乎、衆僉美之、後或稱之、衆吉田中納言在座、曰、豈若乾沙之多乎、佐々木聞之、深以爲羞(第一)

原文を翻譯するには先づ、其如何なる心を以て作者は其文をものしたのであるかを檢する必要がある。兼好法師はこの一文をどういふ意で書いたのであるかを豫め知らなければその文字をのみ徒らに翻譯した處で、それは形骸の譯で生命のないものであらう。北山は吉田中納言の言を以て砂子を鞞の場に布く事が故事であるとし、佐々木はそれを心得なかつた事を耻かしたが、つたとして居る、今其意を以て其譯文に對し、これを批評する事としやう。

原文のかはき砂子の用意やなかりけるといふ詞は、佐々木を耻しがらせた唯一の理由で本文の骨子である、最も力あり、最も皮肉なやうにあらねばならぬ、北山は之れを、豈に乾沙の多れるに、若かん乎と譯し去つて居る。原文の婉曲で、用意やなかりけるの公卿らしき口吻なるに及ばない事甚だ遠い、譯文の如くありては全く喧嘩腰である。又原文のとり溜めけん用意あり難しの語簡にして穩妥なるに反

九〇  
して譯文の「若し平日藉て之れを掌するなかりせば烏んぞこの急に副へん乎」の理屈に陥入つて角々しいのは惜むべきである。けれども其全體からいへば能く原文のまゝを譯出して多く文字を増減しない所に手腕は見えるやうである。  
諸子が和文を漢譯するの好例として進めるに躊躇しない試に其及はざる所を諸子で工夫して見るとよい。

第三十日 練習 (七)

前回の中書王御鞆の事の譯文第二を擧げやう、前回に記した原文と對照する必要がある、勿論第一の譯文と對照して其甲乙を論ずるのはいふまでもない。

(譯文) 鞆社、爲雨雪後、掌事者預備乾沙爲故事、鎌倉中書王、雨後蹴鞆、無此備是日、佐々木入道管之事、乃持數斛木屑布場、得以卒事、衆皆悅之、吉田中納言達者也、獨笑之。(第二)

簡約この以上に出づる事は出来ない、殊に「備乾沙爲故事」といふ前提を作つて、中納言達者也、獨笑之と相照應させたなど随分苦心の痕が見える。けれども譯文は

單に其意を譯せば足るのでない、飽くまで原文の妙味を失はぬやうありたいものである。この文何れの處にも原文の妙を譯出した處がない、純然たる翻案の文である。

(譯文) 佐々木太郎有乾事之才、嘗令藉木屑數斛而掌之、其後鎌倉中書王蹴鞆會、大雨始晴、場中獨濕、於是太郎以所掌之木屑、車載分地、無汚泥之患、衆皆稱之、獨吉田納言聞之曰、蓋令乾沙藉而掌乎、太郎深以爲慚、野史氏曰、蹴鞆爲雨後、承事者必常備乾沙禮也、太郎不知之、不亦固乎。(第三)

これは引いて延ばしたものの例である。唯其、蓋令乾沙藉而掌乎の言は、嘗令藉木屑數斛而掌之の言に照應し來つたのであらうが斯くては原文を北山の如く解せしむるも、なほあまり皮肉過ぎる嘲笑であるまいか。其野史氏曰以下の文は全く蛇足で何等の理由なきものとなるのみならず、原文の叙事文なるに反して、これは解釋文の如くなり、はしないか、説明は文に悦ぶべき事でない。

(譯文) 鎌倉中書王、有蹴鞆會、是日雨初霽、場猶不乾、裾緝爲沾、於是佐々木太郎載木屑于一車、覆泥、溼得能卒、場人皆稱其有幹事之才、他日或稱之、吉田定房前、定房曰、

木屑不雅、豈若敷沙乎。(第四)

これでは全く原文骨子の意味を失つて居る、即ち別箇のものである。なせ、耻か、い、が、り、きの末文を加へなかつたか、木屑不雅と譯し來つた爲めに、この一句の末文を加へて、以爲羞といつた處で、其句が全く力ないものとなり了るからであらう。斯くの如くんば、この譯文のたぐいは原文と別箇のものといふに差支へなからう。諸子は以上四種の譯文に鑑みて、前出保元物語の一節を出来るだけ簡約に今日の文章體に譯出して見る事を宿題とする。

第三十一日

敬語を用ひたる叙事文

敬語を用ひた文章は今日の文體即ち普通文を以て如何に書くか、これは少しくむつかしい事である。其範例として左に新井白石の藩翰譜を擧げやう。

國千代殿いとけなく渡らせ給ひし時、鐵砲うつ事を稻富に學ばせ給ひ、元和四年十月九日、西城の隄の邊に、鴨のいでありしを、こなたの橋の上より、鐵砲にて

うたせ給ふに、あやまたせたまはであたりぬ、ふかく悦ばせ給ひ、御母上の御方に參らせらる、御臺所また悦ばせ給ふ事淺からず、此夜將軍家入らせ給ひしに、彼鴨を御あつものにしたゝめて、御酒すゝめらる、國千代君の、手づから得給ふよし聞しめし、將軍家も御心地よげにて、さるにても、いづくにてか、得たりけん、とありしに、ありしやう御物語有りければ、きこしめしもあへず、御箸をなげ捨て給ひ、何者の供に侍らいて、かゝるふしぎをばふるまはせたりけん、抑我城は父御所の新に修し築かせ給ひ、我にゆづらせ給ひ、我また竹千代殿に參らすべき所なり、それに國千代が身として、其城にむかひ、みづから鐵砲をはなつ事、上は天道にそむき、且つは父御所の、神慮のほともはかりがたし、下は竹千代殿のかへり聞きたまはん事も、其はゝかりなきにあらずと、以ての外に御氣色をこねて御座をたゝせ給ひ、その日彼御供に侍ひし人々たゝされて、御不審をかうふる、其時御前にありあふ女房たちの、後に老いて家に有りしが、御臺所の御方にて仰せられし事、かゝりとは語りしなり、又此物語は、世に遍くしれる所なり、此言葉にて、寔に深き御心の中をおしはかりなば、世の傳ふる所の聞きひがみ

なるを知るべきなり。

白石の文は自ら一家を成して居る。純然たる和文といふでもなく、固より漢文體でもない、近時の普通文に則つて甚だ適當である、殊に敬語を用うるに巧みで、まかもろそかならぬ處が最も學ぶべき點であらう。敬語を用ひたもので今日の文例を擧げる。

小中村清矩先生の御柩の御前に落合直文もとの古典科の國書課出身の人々にかはり一言まをす、先生常に國書出身の人々はわが子の心地すとの給へり、われわれもまた先生を父の如く思ひまつれり、先生とわれくとの間は師弟といはむよりは、父子といはむ方適當ならむ、學校教育はじまりしより、師といひ弟といふはたゞ名のみ、その間の情義また見るべからず、と人はいへり、或は然らむ、されど先生の如き師をもてるわれくは全くそを信ずると能はざりしなり、先生は常に衛生に御心をとゞめられしかば百歳までもたのみ聞えつるに、かくわれくを見捨て給ひて、みまかり給へるは、そもくいかにぞや、かくときし折りは氣も心も消え入るやうなりしが、かくであるべきにあ

らねば、おのもく、手をわかちて御葬儀のことどもに、いたつきあへり御出棺まではなほ六日あり、五日ありと思ひしも、おひくちかづきぬ、ちかづくまゝに、遠くなりゆくこゝちして堪へぬことのみおほかりしが、遂にはや今日のこの日とはなりぬ。(以下略)

これは落合直文氏の小中村博士を祭る文である。其敬語の如き寧ろ藩翰譜の文中に用ひられた敬語の甚だ淡白で、まかも莊重で今日の敬語として却つて適當な事と思ふのである。貝原益軒の敬語は餘程俗に近くて通俗體に用うるにはよいかも知れぬが普通文には不適當であらう、松平樂翁の用ひた詞中に就きて其敬語の如きまた取つて學ぶべきであらう。今日の文で出ず入らずの極く平坦な敬語を用ひた例は、左の如きものである。

門弟十八人、こゝに涙の袂を列ねて、先生に別れ奉らんとす、誠に永き御別にもありけるかな、乞ひて留り給はむ御身ならば、御袖に取纏り、御裾に取うつき申しても、今一度御顔を拜み奉らむものを、御命に代る事の慥ふべくば、誰も誰も勇みて代り奉らんとは願へるものを、昨日は神無月の雨寒く、今日は紅葉の名

に見れど悲しいかな、吾等が先生は逝きて歸り給はざるなり、御恩の一端だも  
酬ひ奉る事はせで、御死骸を御墓に送り奉りつゝ、今は何事も申すべき辭なし、  
唯人の世に三十七年の短き御命はやがて千載に朽ちぬ御名を呼びびて土の下  
なる御臥床に安らに眠り給はむ事こそ願へ、あはれ七度も、また百度千度も文  
の林に色を添むる紅葉先生の貴き御魂よ。

紅葉門下生の其師を祭る文である。敬語は最も要を得てくどくしくない處  
が最も當時の文體に適して居る。即ちこれを煎じつめると、今日の敬語は「奉る」給  
ふ位を程度として、しつこくないのがよいといふのに歸する、諸子、試に敬語を用ひ  
て左の一文を作つて見給へ。

宿題 自分の師であつた人が戦死をしたので、その死を悼む文

第三十二日 和文解剖

前回に和文を例擧したるを機會としてこゝに和文の妙なるものを擧げてこれ  
を解剖しやう、清少納言の「枕の草紙」は最も科學的で最も詩趣に富むで今日のやう

に科學と詩との接近する時に際してこれを繕くと一種いふべからざる妙趣を曉  
る事が出来る、これ蓋し仔細なる觀察と正直なる寫生とによつたものなるが故で  
あらう。

春はあけぼの、やうく白くなりゆく、山ぎは少しあかりて紫だちたる雲の細  
くたなびきたる

（春はあけぼの、時間に於る春はいつがよいかといへば曙に限るのである、は  
といふ詞はある物と他の物とを區別する時に用うるので、餘程力の強い響  
をなして居る、故に曙はといへば春に限ると同一法を以て論ずる事の出來  
るものである、春のあけぼのといふと非常に其趣を異にして居る、諸子はこ  
れに鑑みて助辭の使ひ方に留意せねばならぬ、紫だちたる雲の細くたなび  
きたる、この雲を其種類によつて區別するとほそまひ雲といふのである、そ  
うしてこの一語はよくほそまひ雲の特性を餘蘊なく發揮して居る、ほそま  
ひ雲は輕纖な水蒸氣が凝成して居る一片の細條で、絶えて飄動する事がな  
い、其形は名の如く細眉で幾條の細線が並行して長さも略々同じく中央や

やたくて、兩端微茫として居る、いはゞ一抹の刷毛に掃かれたやうな歐西の土語之れを牝馬の尾といふのも能く名狀し得たものと思ふ、殊に其色彩の美しい事他の雲の及ぶものでない、地上を距る遠ければ遠い程瓦斯の如き汚いものを混せないから日光に透射せられた時新鮮な色彩を認むる事が出来るのである、其日出没の時に於ける紫色の側面と殷赤色の末端とを彩つて漸次黄橙色金色とうつり行くさま色彩美の總てを盡したといつてもよい、そこで本文のやうく、白くなくゆくといふので日出時の第一、時間を表はし、山ぎは少しあかりて、といふので京都あたりの山國でのみ見る事の出来る山頂ばかりの光明世界を描き出し併せて雲の位置を説いた確かに一萬尺以上の高さに算する事が出来る、紫だちたる雲の細くたなびきたる以てほそまひ雲の並行細條色彩の美、飄動せざる性質、斯様なものを盡くあらはして居る、これ實に清少納言が正直な描寫の賜物である。

夏はよる、月の頃はさらなり、闇もなほ螢のとびちがいたる、雨などのふるさへをかし

(春の曙を推したのに對して夏は夜を推したのである、闇中流るゝやうな螢の火を點じ來つて清涼の感を逸せない、雨などのふるさへをかし、こゝに清少納言が趣味に富める事を見るのである、月をいひ螢をいふものは夏の夜に於ける誰れしもの感であらう、其雨を愛するに至つて夏夜の眞趣を掬し得たものといはねばならぬ、春の夜の雨は物うく、秋の夜の雨は淋しく、冬の夜の雨は汚らしい感もある、唯夏の夜一雨來る時の心地はたとへなき愉快なものである、

秋は夕暮、夕日はなやかにさして、山ぎはいと近くなりたるに、鴉のねとこるへゆくとして、三つ、四つ、二つなど飛び行くさへあはれなり、まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるいとをかし、日入りはて、風の音蟲の音などいと哀れなり

秋の愛すべき時を夕暮に選んだ、夕日はなやかにさして、山ぎはいと近くなかた、清澄にして空氣乾燥して居る秋の夕日は水蒸氣の影響を受けずして最も鮮かである、鴉の群を三つ、四つ、二つといふ其荒涼たる狀が數の群に



よつてあらはされて居る、これを二つ、三つ、四つと順次に數を増すものとすれば、何等寂寥の感を加へずして却つて樂く感せられるものである、俗語に「浮いて鷗の二つ、三つ、四つ、いつかあづまへつくばねの」といふのがある、これは數の上からいつか」と聯想し來つて東につくことを希望として居る、本文のは時に歸る鳥の「あはれなり」と見送る、失望的の文字である、數は逆觀念を誘つて三つ、四つ、二つとなる事に情趣がある、殊に雁のつらのいとちいさく見ゆる」といふは距離の遠いばかりでなく夕暮の感を失はない、日没後の蟲の音は誰もいふ事である、唯風の音といひたる處にまた清少納言の面目が躍如として居る、

冬は雪のふりたるは言ふべきにもあらず霜などのいと白く又さらでもいと寒きに火など急ぎ起して炭もてわたるもいとつきくし晝になりてぬるくゆるびもてゆけばすびつ火をけの火も白き灰がちになりぬるわろし、

文章は一轉化して、冬は雪のふりたる言ふべきにもあらずとし、冬は雪としない、文を作るもの、用意である、火など急ぎをこし急ぎといふのに其寒さ

の感が充分である、そしてこの末段に至り、わろし」と叙し去つて却つて火に親む情を盡した處平板なるが如くにして大なる波瀾である。

諸子機を得て、枕草紙を讀むことを怠らぬやうありたい。

第二十三日 詞藻解剖 (一)

ある一文章に就いて修辭の研究をするよりは、ある詩篇をとつて其研究をする方が遙かにわかりが早からうと思ふ。なせといふに詩はどこまでも聲調を尙ぶもので聲調には勢ひ修辭を必要とするから詩の解剖は直ちに修辭の解剖となる事が多い。そうして古詩は最もこの修辭法を巧に用ひて居る、今左に其一例を擧げやう、

行行重行行、與君生離別、相去萬餘里、各在天一涯、道路阻且長、會面安可知、胡馬依北風、越鳥巢南枝、相去日已遠、衣帶日已緩、浮雲蔽白日、遊子不顧返、思君令人老、歲月忽已晚、弃捐勿復道、努力加餐飯、

これは妻君が其夫を憶ふ詩である。

行行重行行。どこまで行かれることやら。與君生離別。戀しい夫と生き別  
離をすることか、船頭可愛や八丈ヶ島へ明日は妻子と生きわかれ這ういつた  
やうな心持ちである、行々重行々同じ詞を重ねて使つたのは感慨を深長にす  
る爲めなので、修辭の重言である、時鳥空を飛びく、啼きく、てなど、いふの  
と同じ使ひ振りである、

相去萬餘里。二人が間は何萬里隔つたか知れない。各在天一涯。かくて夫  
婦まぢく天地の端と端とに居る、來いと云たどて行かりよか佐渡へ佐渡  
は四十九里浪の上ざつと這那意味である、相と各と去と在と、一と萬と自ら相  
對照し來つたので、これを文字上の對照といふのである、一重づゝ八重山吹は  
開けなむなぞ同じ使ひ方である、そして相去萬餘里は第一句(起句)の行行重行  
行に照應して居り、各在天一涯はまた第二句(承句)から生れて、これに照應して  
居る、照應は文章全體の布置からくる修辭法である  
道路阻且長。海山隔て、道は遠いとである。會面安可知。されば再び相見  
んとも覺束ない。今宵別かれて、また逢ふことか、道は山坂旅の空斯様な情趣

である、こゝに至つて以上の句を約め來つたのである、試みに斯様にして讀む  
で見るとよい、行行重行行、相去萬餘里、道路阻且長、與君生離別、各在天一涯、會  
面安可知、意味は斯くて解するに容易である、

胡馬依北風。北方胡地に産する馬は、何れの地に在つても、其故郷を慕うて、自  
ら北吹く風に嘶くといふ。越鳥巢南枝。又聞く、南方越の地に産する鳥は樹  
の枝に巢をつくるに當つても自ら故郷を懐うて南の枝を選ぶといふ、馬にし  
てなほかの故郷を慕ひ鳥にしてなほかのふるさとを懐ふ、まして人ぢやもの、  
焦るゝも無理はなからう、有明の油の、も、とは菜種なり、蝶が焦れて、逢ひにくる  
この心持ちである、胡馬の北に向いて嘶く、必ずしも、其故郷を慕ふのではな  
からう、越鳥の南枝に巢くふ亦必ずしも家郷の懐かしい譯ではなからう、固より  
蝶の有明の行燈に寄る菜花の昔ゆかしき理由ではないかも知れぬ、けれども  
詩人の同情は常に何物をも斯様に見とめるのである、綠雨曾て曰く、げに歌人  
詩人といふは可笑しきものかな、蝶二つ飛ぶを見れば、必ず女夫なりと思へり  
時に還る夕鳥、嘗て曲亭馬琴に告げて曰く、おれは用達に行くのだ、これは詩人

104  
が餘りに何物にも同情を寄する弊害を罵つたのであるけれども己れ的心情を移して他の物を忖度するといふ事は吾人が最も快樂とする處で、詩文の極致は實にこゝにある、まして夫婦別離の悲みに沈むで居る時である、何物にも同情の注がれるのは其自然である、花におく露、小笹の露、こぼれやすきは、我涙。更に明日に入つてこの句節の修辭を説明しやう。

第二十四日

詞藻解剖 (三)

胡馬依北風。越鳥巢南枝。此二句節は修辭上これを駢體といふのである、重言の一句となつて反復せられたやうなものである、其あらはして居る意義と、其言語の順序とが必らず同一でなければならぬ、こゝで大略重言と駢體との區別をいつて置かう、刈らばとく刈れ淀野の眞菰、刈らば月かげ、下に澄む、底に澄む、刈ればく、月影、下に澄む、底に澄む、この歌で、刈らばといふ詞が重複せられて居る、この二つの詞の重複は其間に他の句節を挟むで居る、又刈ればといふ詞が重複せられて居る、まかしてこれは刈れば刈ればと直ちに重つて、其間に

何の句節乃至詞を挟まない、斯様に一、文章の聲調を、整へる爲めに、若くは感慨を、深大ならしむる爲めに、この何れかの目的を以て言語の同じものが繰り返へされたもの、これを重言といふのである、又この歌のうちで、月影、下に澄む、底に澄むといふ二個の句節が重複せられて居るのを見るであらう、斯様に、二句節の重複を駢體と名づけるのである、句節といふのは言葉が連らなつて、一つの完全な意義を形造つて居なければならぬ、故に句節は皆主辭といつてあらはさうとする意義の主になるものと、これをあらはす爲の從辭といふものがある、この句節に就いていへば、月かげは主辭で、下に澄む、底に澄むは從辭である、又この辭様で、其句節の反復のありさまに多少差異のあるものがある、吹けよ、松風あがれよ、簾今の小吹の主見たや、この二句節は吹けといふ命令とあがれといふ命令とは自ら異つて居り、松風と簾とは自ら異つて居るけれども、其言語の順序は同じであらう、そうしてまた其意義に至ると、今の小吹の主見た、いといふ目的に一致する、斯くてこの二句節の反復もこれを駢體といふのである、胡馬依北風、越鳥巢南枝はこの後者の方に準すべき駢體法である、

以上第一句から第六句に至るまでは其別離の情を直寫し來つたのである。冒頭先づ其心情を吐露した處に人の誠意まことがあらはれて最も同情に堪へないさまが見える。そうしてこの第七第八句に至り其同情は更に他に轉じて譬喩となり諷怨となつたのである。さてこの譬喩は修辭上如何なる種類に屬するか、これを説明するに先立つて以上の詞藻解剖は辭藻に關するものゝみであつたから、今更に其轉義に屬するものゝ解剖をしやう。

相去萬餘里。此轉義は數理的關係に基いたものゝ一例である、即ち定數を以て不定數に代ふるものである。萬餘里と其里數を定かに示して其意は何百里か何千里か知る事の出來ない、唯無闇に遠いといふ感をあらはしたものに過ぎないのである。思て通へば千里も一里、逢はず戻ればまた千里の例である。何の爲めに斯様な轉義を用うるかといへば、則ち理解を助け、印象を明らかに著しくならしめ、文章の勢力を添へる爲めである。各在天一涯、この轉義は反對に基いたものゝ一例である、即ち誇張法である。物事を一層感深く明らかにする爲めに普通の意義から以上に飛び越えて皇張誇大にするのである。夫婦が如

何にはなれなくであればとて天地の端と端とに居やう筈はないけれども其離隔して居る情をいへば、則ちこれ程にも思はれるのである。一日千秋の思ひといふのと同じやうな意味である。唯未熟な作家は誇張を慎まねばならぬ。この使用法は最も老練と獨創を要するもので陳腐な誇張は寧ろ興を害する。更に進んで明日は比喻法に及ばう。

第三十五日 詞藻解剖 (三)

胡馬依北風、越鳥巢南枝。轉義中類似に基きたるものゝ一例である、即ち二物を混同して一物として記すもの、即ち其擬人的風喩と名づけるものにあてはまるのである。馬鳥にも人のやうに故郷忘れ難き情のあるものと思ひ、此心を以て馬鳥のする事を見たのである。山雀が籠の内での恨み、言籠が小籠でもんどり打たれぬ、山雀がそんな事をいはず筈はないけれども、詩人の同情を以て矢張り其情なきものをまで其情あるが如くにしたのである。擬人法は詩人の同情が其生命あるものとなし、何にまれ其接した處へ人間と

108

同じやうな感を引き起させて、人間の體貌意思を附與するのである。擬人法は轉義中最も程度高く、最も大膽なものである。そこで擬人法には完全なもの、不完全なものとの二種がある。遠山にもたれるさまや寝る胡蝶もたれるとか寝るとかいふのは人間のする動作から他に及ぼしたのである。これらは完全に人間に擬したといふよりは、其動作をのみ人間に擬したといふ方が穩やかである。これを不完全な擬人法といふ。「一思案出來て飛びこむ蛙かな斯様に全く生命を附與したものを完全な擬人法といふのである。この胡馬北風の二句は完全な擬人法に屬して居る。さてこの二句は何の爲めにあらはし來つたかといふに、恨みながらもまたうち向ふ月はゆかりかうき人のといつたやうな感で良人の出て行つた跡を打ち眺めては今は何處どこに如何にしてあるぞと何につけ彼かにつけ思ひ煩らふのである。この情を露あらはにあらはさないで、同じ思ひの他のもの、即ち胡馬越鳥の情をかり來つてこれを風したものである。これを風喩ふうごといふ。風喩の働は一つの完全な觀念を容易に又明瞭に表はさむが爲め、假りに他の事物の状態を借り來つて描き出すのである。

以上を以て轉義の種類に三つあることを知つた。第一關係に基いたもの、第二反對に基いたもの、第三類似に基いたもの、そうして轉義の分類は二つ三つの外に出でないのである。今左の如くこれを小別する事が出来る。

轉義

- 一、類似に基いたもの、
  - い、直喩するもの、
  - ろ、隱喩するもの、
  - は、混同するもの、
- 甲、混喩するもの
- 乙、擬人
- 丙、風喩
- 丁、寓言
- 二、關係に基いたもの、
  - い、數理的なもの(相換)

る、論理的のもの(易名)  
 三、反對に基いたもの、  
 い、誇張  
 ろ、貶稱  
 は、美稱  
 に、反語

轉義は斯様な分類法を作り得るのである、修辭の條と對照して其詳細を知り得るであらう。

第三十六日

詞藻解剖 (四)

餘り解剖が微細に渡つた爲め説明が長延たから改めて前掲の詩の後半段を録して諸子が記憶を更に新にしやう。

相去日已遠、衣帶日已緩、浮雲蔽白日、遊子不顧返、  
 思君令人老、歲月忽已晚、  
 兼捐勿復道、努力加餐飯、

意味は前半段から續けて見ねばならぬ。

(相去日已遠、君行きくして止らねば一日く二人の間は遠り行くのみ、衣帶日已緩、されば君を思ふ心は日にいや勝つて、肌身も瘦せ衰へ纏着物さへ緩くなりゆくのである、戀にもぞ人は死にする水無瀬川底ゆゑが瘦す月に日にけにこの歌は戀ゆゑ今は死にそうである、あの水無川の河床が水の流に磨り減らされるやう日毎月毎に我身は瘦せて行くわいと云意なので、日已緩といふ意は和語の月に日にけにといふのにあたるのである、この二句の詩の意をいへばぬしと別れて鹽だち茶だち今ぢや二重が三重廻はるといふやうな心持ちである、この俚歌の二重が三重廻るといふのは體のだんく、瘦せて帯のゆるくなつたありさまである、これを修辭の方からいへば、日已の語を二句に重複して用ひ、更らに兩句の言語の順序を同一ならしめて日已遠と日已緩と相對せしめて居る、即ち重言にして駢體なるものである。  
 (浮雲蔽白日、白日照さむとすれば浮雲之れを蔽ひ妹脊の中にも隔ての雲が晴れやらぬ、遊子不顧返、斯くて何處までわが夫は漂泊はむとてか、わが方

は願みてもくれない、こゝに浮雲蔽白日といふのは、月にひら雲花に風まゝに  
 ならぬ浮世のさまをいつたばかりでなく、遊子の願返せざるは、浮雲の白日を  
 蔽へるが爲めに、といふやうな意も含むで居る、さればぬしを思へば照る日も  
 曇る月のある夜も闇で行くといふ切ない情の夜もわかぬ程であるのに、良人  
 はなせに斯くまで無情ぞと怨む意があるのである、この二句は前半段末の胡  
 馬越鳥の二喩と相應じて居る、即ち胡馬は北風に嘶くといふ、越鳥は南枝に巢  
 ふといふ、われは良人を思つて照る日も曇る程である、これは一つの照應であ  
 る、胡馬北風に嘶き越鳥南枝に巢ふ馬でさへ鳥でさへかうであるのに、遊子は  
 かり向きもしない、これは他の一つの反顧である、文の照應反顧は隱微の間に  
 ある、詞藻の趣致誠に細やかであるといはねばならぬ

(思君令人老、君を思へば齢も老い行くやうである、歲月忽已晚、又歲月も何  
 時の間に經つたか知らぬ間に忽ち晚れ果つるやうな心地がする、あふ事をな  
 がらの橋のなからへて、こひ渡るまに、年ぞ經にける、斯様な心持である、此二句  
 について老と晚とは文字上の對照である、而かも詞藻の上に最も注意すべき

第三十七日

詞藻解剖 (五)

諸子が文を作るまたこの修辭法に注意することを望むのである。

は最初に行行重行行といつて語を起し、これに應じて、日已遠といひ、日已緩と  
 いひ、こゝに至りてまた忽已晚といひて過去を示す、副詞を重ね來り、時期の見  
 る、く、行き去つて昔見た夢は、趁ふによしなく、唯暗恨の去り難いさまが見え  
 るやうである、

(弃捐勿復道、君が妾を見捨て給ふともそれは恨みとする處でない、努力加餐  
 飯、唯食事を進められて身體の恙なきやう神かけて祈るのである、この結末の  
 二句はすべて自分の私情を打ち捨て、唯愛人の幸福を祈る、夜半にや君のひ  
 とく、越ゆるむと誦んだ古歌の意と同じである、眞實其良人を憶ふ情が迸つて  
 妙趣掬すべきものがある、)

以上詞藻解剖の例として擧げた古詩は十九首のうち其第一章である、以下悉く  
 を解剖説明する暇がないから修辭を主として左に其一二を示さう。

其二

青々河畔草、鬱々園中柳、盈々樓上女、皎々當窗牖、娥娥紅粉粧、  
 纖々出素手、昔爲倡家女、今爲蕩子婦、蕩子行不歸、空牀難獨守、  
 この一章に於て記事と叙事との調和の妙を知らねばならぬ、

（青々河畔草、鬱々園中柳、盈々樓上女、皎々當窗牖、娥娥紅粉粧、  
 纖々出素手、昔爲倡家女、今爲蕩子婦、蕩子行不歸、空牀難獨守、  
 園のうちに茂つて居る柳之だけの詞であるが、詩は此外に餘韻を有つて居る、  
 即ち之から聯想せられる他の興趣である、先づこれを一つの記事叙事として  
 見ればかの夫に捨てられ獨り綿々の情に堪へない婦人の住むあたりの光景  
 を描き出したものと見る事が出来る、川がある、岸は青草に萌えて居る、園があ  
 る、柳が茂つて居る、既に閑靜で墨田のほとり權妾を隠まうたあたりを思ひ出  
 される、若しこれを叙事抒情の文として見れば例へば何をくよくく、河端柳水  
 の流れを見てくらすといふ心持ちである、見るもの一つとして心を傷めしめ  
 るものはない、青々たる草を見れば己のうら若い身を思ひ空園を守る寂し  
 さを歎き、鬱々たる柳を見れば自分の境遇に引きくらべて何の物思ひぞとい

ひたくなる、修辭上この二句の駢體たる事は既に説いた例によつて知る事が  
 出来るであらう

（盈々樓上女、皎々當窗牖、  
 そしてその美しいつやくしい顔を窗から差し出して居る、之は前の二句に  
 呼應して前二句と共に一つの景色を點出して居る、即ち樓は河に臨み、窗は園  
 を望むに適して居る、さうしてこの樓上一個の美人を置いたのである、又かの  
 美人の窗に倚つて居るのはこれを前に叙べた草を見、柳を見て情を抒べて居  
 るさまなのである）

（娥娥紅粉粧、纖々出素手、其臙脂白粉に粧を凝らして居るさまは花よりも美  
 しく其象牙彫のやうな優しい眞白な手を出して居るさま言葉に盡せぬ美し  
 さである、以上青々鬱々、盈々皎々、娥々纖々、斯様に疊字を用ひ來つたのは文章  
 の聲調を保つ爲めで、一種の重言とも見る事が出来る、こゝに辭様の上に注意  
 すべきは其照應のありさまである、盈々樓上女は青々河畔草と自ら相對照し、  
 娥々紅粉粧は鬱々園中柳に自ら對照する、故に盈々樓上女皎々當窗牖の二句



は併せて娥々紅粉粧、織々出素手と修辭上の駢體たる事を知らねばならぬ。以上は夫を懐ふ婦人が婦人自らを客觀的他から見られたやうに記したのである。詩經ではこれを輿の體といつて先づ冒頭他の物を假り來つて説き起す體である、以下はこの婦人の事を自分に歸つて主觀的に同じく説明するが如く叙するのである。

(昔爲倡家女、今爲蕩子婦、想ひ回せばわれ昔は歌妓としてかの河畔の草の如く世に崩え出でゝゐたものが今はた放蕩者の妻となつた、蕩子行不歸、空牀難獨守、さても其後わが蕩子は更に歸つて來ない、何地に行つた事か、此春まだ若い女を描いて、あはれ空圍を獨り守るに忍びない) 景によつて情を動かし、情によつて景を見たる懷春の佳人を描くに最も妙を得たものであることは云ふ迄もない。

第三十八日 詞藻解剖 (六)

其三

青々陵上柏、磊々澗中石、人生天地間、忽如遠行客、斗酒相娛樂、聊厚不爲薄、驅車策駑馬、遊戯宛與洛、洛中何鬱々、冠帶自相索、長衢羅夾巷、王侯多第宅、兩宮遙相望、雙闕百餘尺、極宴娛心意、戚々何所迫

この章に於て詩文と人生との關係を察せねばならぬ。

(青々陵上柏、丘の上の柏は青々として居る、磊々澗中石、溪間の石は重り合つて居る、人生天地間、忽如遠行客、人は天地の間に生れて瞬時にして死ぬる事は遠方に行き去つた旅人のやうである、と云ふので、いに先づ人生觀が見える、陵上の柏を見れば四時嘗て色を變へない、澗中の石を見ればいつも同じやうに重り合つて居る、常住無窮の形に引きかへて、人間はどうであらう、生れて來たかと思ふと直ぐ死んで仕舞ふ無常極まるものである。修辭上第一第二句は駢體である事は論を俟たない)

こゝに味はうべき問題がある、即ちこの古詩十九首を通じての人生觀である、先づ其第一婦人の夫を憶ふ詩に於て婦人として最も其勢力の強い點である、彼が殆

んと其愛人の爲めに専ら献身的骨瘦せ肉衰ふるまで戀ひ焦れて居る其情人が彼を見捨て、遠く去つて歸らないにも拘はらず、彼はなほ其瘦せ衰ふるに甘むじて身老ふるをも厭はず何れの日たるをも知るによしな遊子の歸りを須つのである。而も其情人の無情を恨らむといふとも、決して自暴を起さない、最後に語を寄せて曰く、奔捐復た道ふと勿れ、努力餐飯を加へよと其健氣なさまは誠に掬すべき處がある。彼が人生觀は飽くまで此心を以て起つて居る、飽くまで希望を有し光明を認めて、決して失望することがない。其第二閨怨詩に於ても亦然りである。かの青々たる河畔の草を見、かの盈々樓上の女を想起して、兩々對比し來り遂に蕩子行きて歸らず、空牀獨り守り難しと叫んで居る其旺盛なる情熱は誠に明瞭で、一點有耶無耶の表えきらないやうな婦女子の一般に有する缺點がない。第三此人生觀の詩に至つてかの陵上の柏を見、洞石を見て人生の果敢なきを觀じたけれども亦忽ちこの厭世的の觀念を打ち破つて心機一轉直ちに樂天觀を抱くに至つた。總て彼が人生觀は燃ゆるが如き熱情と強大なる意志の力と相須つて飽くまで光明を追はむとし、飽くまで希望に向つて猛進せむとする傾向を有して居る。この

意を體してこの詩に對すると興趣更に深いものがある。全篇の布飾は彼が光明的骨子の上に打ち建てられて居るのである。

〔斗酒相娛、聊厚不爲薄〕 されば一斗の酒を傾けて陶然酔ひを買ひ、それを以て樂みこれに盡くと爲し決して不足などといはぬ。驅車策駉馬、遊戯宛與洛とかいふ都邑の間に遊びまはり、唯自適して敢て追らずに居る。

〔洛中何鬱々、冠帶自相索〕 それが洛中となると亦流石に萬乘の君の座す處とて鬱々としてさも隆むらしく、冠帶して居る人々の間で互に相索め相樂むで居る、即ち前二句の駉馬を策つて宛と洛とに遊戯するものに對して、これは洛中に冠帶して相樂むさまを對照したのである、即ち自索むといふので自然と富者は富者、賤しきものは賤しきものと類を以て集るさまがあらはれて居るのである、そこでこの二句が前二句となせ對照するかといふに、修辭の對照は因と相反する二個の思想を兩々對せしめた時にいふのが本來である、即ち白をいよく、白からしめむが爲めに黒を以て之れが對照とする類である、驅車

策駑馬、遊戲宛與洛の二句が洛中何鬱々、冠帶自相娛に對照するのは其貴賤の  
分るゝ處相對するので句法の上からは互に顛倒して居る、又最も變化ある筆  
法である)

(長衢羅夾巷、王侯多第宅、) 碁磬の目のやうな都大路は長い街衢が東西に通じ  
て其れにはまた狭い巷が幾條となく連つて居る、其また巷には王侯の第宅幾  
つとなく建て並んで居る、兩宮遙相望、雙闕百餘尺、彼の洛陽の南北兩宮は、  
遙に相望み合つて高く聳へて居る、隻闕は百餘尺もある、こゝに兩宮と雙闕は  
對句である、そして遙相望と一つをいひ、他を百餘尺といつたのは句法の變化  
である、常に同じ句法を用ひ來つた時、之を變化するが必要である、さなければ  
讀者は必ず倦むに至るのである、)

(極宴娛心意、戚々何所迫、) 試にこれらの第宅宮殿で宴を張り心を娛ましたと  
せば、決して戚々たる憂などのあるべき筈はない、こゝに戚々の二字は遙かに  
磊々の二字に照應して、何處迫は又忽如遠行客といふ句に反顧して居る、人生  
の悲觀は斯くの如くにして打破せられ、今は天空快濶な樂天觀を得たのだ)

第三十九日

詞藻解剖 (七)

其 四

今日良宴會、歡樂難具陳、  
彈箏奮逸響、新聲妙入神、  
令德唱高言、  
識曲聽其真、  
齋心同所願、  
含意俱未伸、  
人生寄一世、  
奄忽若塵埃、  
何不策高足、  
先據要路津、  
無爲守窮賤、  
戀軻長苦辛、

(今日良宴會、歡樂難具陳、) 今日の宴會は直に快樂溢るゝばかり其狀到底筆や  
詞に盡されない、彈箏奮逸響、新聲妙入神、十二絃琴を弾じ出すと不思議の  
妙聲を放つて、新しい調子が天籟の妙韻を傳へ、神境に入つて居る、令德唱  
高言、識曲聽其真、妙歌者は高らかに謠ひ出で、知音の人は其真諦を知る事が  
出来る、色をも香をも知る人ぞ知る、といふのと同じである、)

(齋心同所願、含意俱未伸、) 妙歌者令德の事である、は皆心を同じうしてどうか  
この音の眞味を解してくれる人があればよいがと思つて居る、けれども唯そ  
れは意に含む許りで未だ知音の人を得ない爲に其志を達する事が出来ぬ、  
これまでは比喩である、以下其人生觀である、

(人生寄一世、奄忽若塵埃、譬へば人生は塵埃の飛ぶが如きもの、この世を頼みに生きながらへて居た處で忽ちにして去り行く事まことに果敢ない限りである、何不策高足、先據要路津、されば先づ其塵埃の如くになつて飛むで仕舞はむうちに早く知音を求めて足を高飛びさせてかの要路の津に據るやうによき位置を作らないのであるか、無爲守窮賤、懸軻長苦辛、まごついて居る氣が知れないでないか、貧乏を一生懸命に守つて不遇のうちに長い間を苦辛するが如きは、まことに愚の極である)

以上は大要の解釋である。こゝにも亦其人生觀の飽くまで現在を土臺とするもので、今日に働き今日に生きて行かうといふ活潑たるものなる事が知られる。

終りに臨むで、諸子が文を作るに當つての用意を述べやうと思ふ。

先づ諸子が文を作るの目的を聞かう、單に巧妙明晰な詩文を作らうといふのであるか、單に日用の手紙のやり取りに事缺けねばよいといふのであるか、それとも亦諸子自らの氣韻を高めむとするのであるか、更に或は一步を進めてこれを以て

大に天下に呼號しやうといふのであるか。諸子若し日用の手紙のやり取り乃至は簡単な社會の狀態、人生の出來事、斯様な事を描寫し得るのを以て目的とするなら別にむづかしい文章の作法を研究するの必要はない、去つてかの口語の使ひやうを研究してこれを其まゝ文章に綴つてそれで事足る世の中でないか、若しまたこの以上の望を有つて巧妙明晰な詩文を作らうといふのであらば、必ずしも余輩がこの講義に於て奨めるやうな精神的文字は必要としない、花の如き蜜の如き美しく甘そうな飾りばかりの文例が世にはいくらもある。のみならず何等詩趣の妙を説かず、人間精靈の有り難さをも知らせずして形式をのみ教へんとする無風流な作文教科書は世に澤山ある。是等は皆精神的文字のない代りに美しく、甘そうでも、順序立つても、整頓して所謂飾りばかりの文例である。かの氣韻を高めむとするものゝ如き就いて之を研究するがよい、本講義は徒らに氣韻の高い道學者めける文士を養成するのが目的でない。活々として實世間の人間となり、人間中の幸福者として一生を終る事の出來る者を作るのである。我が講義の目的は理想界とこの世界とを連結して吾人の幸福を飽くまで圓滿に飽くまで趣味多く

過をさせやうといふのである。即ち言を換へていへば、學校教育の如き智識の開  
發の外に人間として最も尊むべき靈精を啓發して自然の美を感覺し自然の美に  
浴して百難に處する克く其胸襟快濶に其心事の高潔ならむことをつとめるので  
ある。この意味に於て古詩十六首の如き最も光明的で最も希望に満ちて居る點  
を諸子に勸めた次第である。唯本講義諸子の便を計り僅かに百日を以て中學卒  
業程度の作文力を得せしめむとしたのであつて、いはば其骨子を與へたやうなも  
のである。この以上は諸子が自力の効に待たなければならぬ、若し其作文研究の  
羅針盤となり磁石となり或は航海の舵機ともなるものをいへば東京にあつては  
日本文章學院の文章講義録であらう、同院の教授は最も懇切で、最も活氣に富むで  
吾人が諸子に勸誘するに足る靈活的教授である。

作文獨習書完

明治三十八年九月七日印刷  
明治三十八年九月十日發行

(定價金壹圓)

不許複製



編輯所

大日本國民中學會

編輯兼  
發行者

河野松之介

東京市神田區板橋  
町甲賀町十番地

印刷者

山口竹二郎

東京市京橋區  
四丁目十五番地

發行所

東京市神田區南千代町  
電話本局三千四番

東京國民書院

# 文章添削規定

- 一、本書購讀者は、其創作にかゝる文章の添削を本院に乞ふことを得
- 二、添削は一人六篇を限る、一篇は八百字以内たる可し(八百字を起ゆるときは二篇と見做す)
- 三、一篇につき添削券一葉を附すべし(八百字を起ゆるときは二葉を附すべし)
- 四、原稿は一行二十字一枚二十行以内楷書にて半紙に認む可し
- 五、添削は無料とす、但原稿返附に要する郵税(三十文)を添ふ可し
- 六、原稿は(一篇)十日以内に添削を了へて返附するものとす
- 七、原稿は『東京國民書院編輯部』に宛て送らる可し
- 八、原稿の字體亂雜なるもの、半紙以外に書したるもの、返稿料無きもの及び添削券を附せざるもの等は總べて返附せず。

東京國民書院編輯部

會長 前文部大臣尾崎行雄 講師 東京高等師範學校教諭十數氏  
(科外講師博士學士三十餘氏)

## 本會の特色

▲本會講師は、文部大臣直轄なる高等師範學校の中等教育を擔任せらるる、先生方なれば、會員は實際此全國の模範學校に入學せると同じ。

▲各學科皆聯絡を保ち、講義の分量程度を一定し都て丁寧懇切の講述を主とし何人と雖も難解の憂なし

▲本會の會費は最も廉也

## 正則 中等學講義錄

## 講義錄批評

▲萬朝報計……中等教育程度の講義錄は何十種もあれど大日本國民中學會の發行物ほど善きものは他に見えず。

▲報知新聞評……趣味と實益とを併得せしむ、中等教育程度の講義錄中優に一頭地を抜くもの也。

▲電報新聞評……教授の方法新式にして丁寧懇切なるは、大日本國民中學會の講義錄を第一に推さざる可からず。

何時にても入會を許す  
 東京神田北神保町  
 電話本局三千四番

大日本國民中學會

## 學制の大刷新

本會は他の通信學會に先して、正則教授の實を擧げんが爲め、今回學制に大改良を加へたり。即ち從來の三年卒業制度を二ヶ年半に短縮して(講義錄の紙數増加)、更に之を五學期に分ち一學期六ヶ月を以て中學校一ヶ年の學科を講習するを得せしめ、望により各學期何れにても隨意に入學するを許す

## 科外講義の附録

會員に社會的智識と趣味教育を興ふるの目的を以て、博士學士各科一流の大家三十餘名を新に科外講師に聘し、毎號大附録として其講義を連載す。

## 雜誌新國民の發行

學制の刷新と共に、雜誌「新國民」を發行し會員に**無料進呈**するものは、在學中

▲規則書は申込み次第贈呈す。

海軍々々令部長 伊東祐亨公  
 前文部大臣 尾崎行雄公  
 前東京市長 三田 赤堀又二郎  
 前帝國大學教授 寺内正毅公  
 陸軍中將 横井忠直公  
 參謀本部編輯官 丸山正彦  
 從軍五部教授 監 輯  
 陸軍大學院教授 兩先

# 日露大戦史

總クローヌ金文字入  
 本製箱入類美本紙數  
 大版八百餘頁  
 定價壹圓五拾錢  
 (小包料金十五錢)

◎日本新聞評 日露戦争は我が日本民族が數十年來涵養し來れる所を傾注して其發展の途を開くと同時に、任侠以て同種同族の隣邦のために致さむとせるもの、寔に我國にとりては空前の大事也、これが事を記して後世に傳へ世道の頹廢を防ぎ兼ねて史家をして事實を認らしめざるんとせば、今の時に及くはなし。九山赤堀二氏は夙に職を陸軍教官に奉じ、兵事兵語に通する、と尋常文筆の士の比にあらざるべし其行文の流麗なるは亦幾多の興味を添へ雄渾の辭は壯絶の事と相待ちて妙趣云ふべからず、若し夫れ保元平治太平記等と相對比して之を讀み之を味はむか、たゞに事を記し實と相對せるの以外幾多の興味あるを覺えむ。初編は筆を遼東還附に起し、遼陽大捷に終る。

## 發行所

東京神田駿河臺  
 南甲賀町十番地

## 大日本國民中學會

第一二三版を通じて五萬部賣切  
 好評嘖々 第四版印刷出來  
 國民の必ず一部を備ふべき寶典

## 大日本國民中學會編 鐮木清方君畫

### 歡迎・送行 弔祭慰問 軍國文範

洋裝全一冊  
 體裁高雅頗美  
 定價金參拾五錢  
 郵税金六錢

講和談判すでに成りて、うららかなる平和の曙光は滿洲の野遼東の山に輝きそめたり。百萬の壯夫凱旋するの日また遠きにあらざる可し。嗚呼彼等は屍山血河の間に出入し萬死の間に一生を得て故國に歸り來る也。滿腔の熱情を披瀝して其情を慰め其功を讃するは、實に我等國民の義務にあらずや。本書は這歡迎祝捷に要する祝文式辭及び演説の範例を掲ぐる事頗る豊富なるのみならず、各篇皆情誼殷到にして血あり涙あり、聞く者をして感に堪ふる事能はざらしむる底の大文字也。是れ實に現下國民の必ず座右に備ふ可き寶典也とす。添ふる所の弔祭及び慰問送行の各文皆體に合し格にかなへ、情至り諳つくせるに於いて、他類似の諸書と異に選を異にす。卷末、これ等國民の慰問送行歡迎に答ふ可き軍人の文例を添ふ。口繪は鐮木清方子の筆に成る、傷を負うて蹠跟たる軍人を背景となし、温顔玉の如く白姿神々しき看護婦が一莖の白百合に恍たるの狀を描く。蓋し同子苦心の作也。

發行所 東京東區京橋區 國民書院

15/3/40

新派俳句大家 佐藤紅綠先生著

# 俳句作法

定價參拾錢

郵稅四錢

一鱗を描いて金龍躍如たるは、是れ俳句の特色にあらずや。其句法遒勁にして着想奇拔、僅々十七字の短詩形を以て中に千萬無量の詩味を藏す。俳句は和歌と共に人の國より傳はらざる日本文學の精華也。吾人は俳句の趣味を有する人に向つて益々其研鑽と修養とを望まざる可からず。只年少諸子の憂とせしは、俳句作法を説けるものなきこと也。なきにあらず、説述の嶄新にして且つ丁寧懇切を兼ねたるものを見る能はざること也。こゝに俳壇の明星佐藤紅綠先生あり、夙に旗幟を新派の一角に樹て、天下の推重する所たり、今本院の請を入れて『俳句作法』を公にせらる。説述主として初歩の士の入門捷徑たらしむるに在り、こゝを以て懇切にして平明、諄々として教へて倦まず、何人と雖も讀んで解し難き所なく、讀誦一過、十七字を列ぬると意の如くなるに至るべし。眞個俳壇の寶典として、本院はこれを江湖に薦むるもの也。

發行所 東京 東國國民書院

萬朝報記者 田口掬汀先生著

# 幻影

(新時代文範)

近時青年諸子新時代の文範を求むるに汲々たるも未だ之に適するもの無し。蓋し文範には小説評論、美文、寫生、田口掬汀先生著の『幻影』は即ちこれ等の諸體を兼ね備へたる傑作のみ也。『幻影』は小説、美文、寫生、田口掬汀先生著の『幻影』は即ちこれ等の諸體を兼ね備へたる傑作のみ也。『幻影』は小説、美文、寫生、田口掬汀先生著の『幻影』は即ちこれ等の諸體を兼ね備へたる傑作のみ也。

全一冊紙數三百餘頁 定價十四錢 郵稅六錢

大評第三版發賣

▲新派和歌大家 金子薰園先生著 『小詩國』 新派和歌研究者の必ず ▲定價貳拾五錢 座右に備べき寶典也 ▲郵稅金貳錢

高等師範學校教授文學士 登張竹風先生序 日本大學教授文學士 橋本青雨先生著

# ゲエテの詩

口繪 ゲエテ肖像及其家庭 附錄 原文及註釋(八十頁) 體裁 本製總クローネ金筆入 定價 四拾五錢郵稅六錢

荷くも筆を執る者にしてゲエテを知らざるはなかるべし、ゲエテを知らざるは吾人の大痛癢也。ゲエテは世界の美文豪にして其詩皆流麗雄渾、殊に戀を描き愛を謳へるものは熱烈清醇を極めて、青年子明を主として感に堪ふる事能はざらしむ。△橋本文學士今縦横の彩筆を揮うて其詩數十篇を譯す、詩形の平得る所極めて大なるべきを信ず。好評噴々今回第二版出來す

東京 東國國民書院 發行所 東京 東國國民書院



●● 作文 ●●  
●● 法章 ●●  
●● 通信 ●●  
●● 教授 ●●  
●● 生徒 ●●  
●● 募集 ●●

日本文學院

▲本院の目的  
本院は通信教授法により「文章講義録」を發行し、小説等を教授するを以て目的となす。「作文獨習書」を讀了して更に進んで文章作法の蘊奥を知らんとする人の講習に適す。

▲講義録  
講義録は大判百八十頁、毎月一回發行、一ヶ年興趣極めて多く何人と雖も難解の憂なし。

▲本院講師  
大町文學士、寺内文學士、兩角法學士、永井大長井外國語學校教授其他大家數氏

▲文章添削  
毎月文章四篇づゝを無料にて添削す、添削は本院講師自ら之に當り、最も嚴正に最も綿密に加筆して一字の疵なきに至らしめ、且つ毎篇批評を附す。返送一週日以來、決して期を誤ることなし。

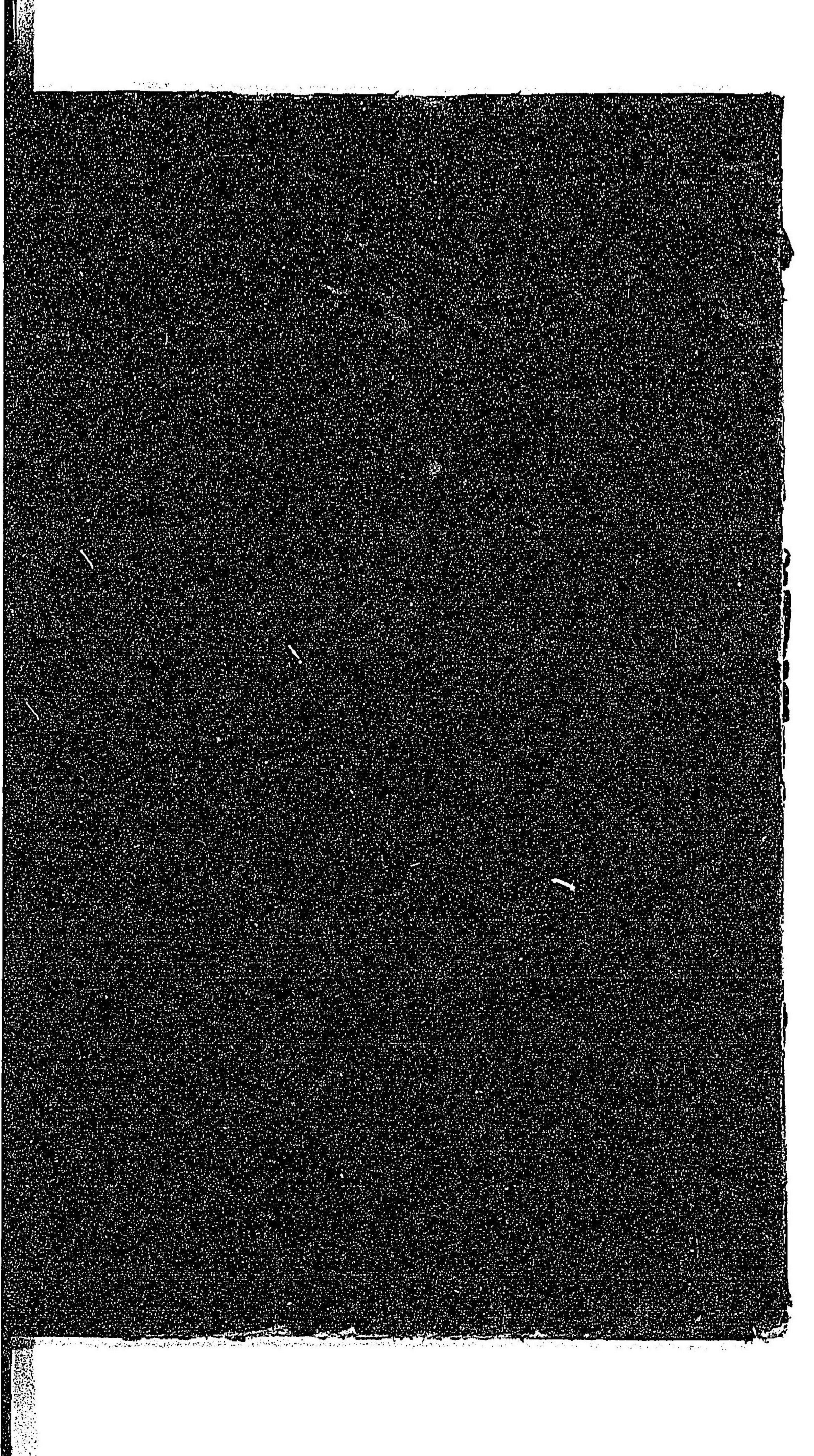
▲教授の特色  
各學科講義の程度を一定し其量を定め、皆よく聯絡を保ちて孤立の弊なからしむ、彼世間の講義録の雜駁なる講義を列ぬるものと同一視すること勿れ。

▲就職の紹介  
参考として斯道の専門家に囑し、小説家たる準備、新聞記者たる準備を詳説し、優等卒業生に對しては、文筆に關係ある職業の紹介をなすものとす。

▲入學の好機  
新學期の開始近きに在り、此際入學するを以て最も便也とす、規則書は往復端書にて申込め。

東京 牛込 区 日本文學院 事務所

99  
158



99  
158

079096-000-9

99-158

作文独習書

大日本国民中学会／編

M38.9

DAC-3014



